

標注

古事記讀本

神代之部

7  
44

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5

始





7  
1  
44

標註古事記讀本

神代之部



大教正本居豊頴先生序  
大學教授内藤耻叟先生序  
正七位村岡良弼先生校閱

神代之部

# 標註古事記讀本

播磨

加藤高文先生撰



№2144/111V.



秋又の書きさうに所その外のさか下を  
迎ふにいら志すあふ讀中をさく得んやま  
と世に行をたて人々競ひあつたの  
うらむをほりする人の多きふとる  
松葉その世の心の道のすまぬ  
ほとねまひしられていとらうらゝは

序



如藤原文相のその書に於て、その古事記の  
讀本をひらかれをまゝにして、その書に於て  
その古事記の古事記傳古事記  
の古事記の古事記の古事記の古事記の  
古事記の古事記の古事記の古事記の  
古事記の古事記の古事記の古事記の  
古事記の古事記の古事記の古事記の  
古事記の古事記の古事記の古事記の  
古事記の古事記の古事記の古事記の

古事記の古事記の古事記の古事記の  
古事記の古事記の古事記の古事記の  
古事記の古事記の古事記の古事記の  
古事記の古事記の古事記の古事記の  
古事記の古事記の古事記の古事記の  
古事記の古事記の古事記の古事記の  
古事記の古事記の古事記の古事記の  
古事記の古事記の古事記の古事記の



この頃このまかせありしをすめる世の名人  
多かりしかばまゝに事あるまゝに、俗のむねの  
こころをわたりて、そのまゝに、いふことあり  
かまらざるに、おろしに、おろし

明治二十四年九月の十日何日あり

本居豊穎

古事記續本序

播州網干加藤先生學古道今之士也嘗受  
業於野々口翁夙曉古道又嘗從事於治  
民之官有幹旋之才蓋其學之與才兩兼之  
皆原之古用之今是謂實學實才孰曰不  
然乎先生家世高家於鄉里嘗掌傍近百  
數十村委積運輸之事具有經畫上下悅



服而其出處進退之義亦綽然有餘裕  
明治初 京師徵焉固辭不出甲府辟焉  
亦不就也後出應飾磨縣辟者蓋以事  
關于一方民命也終事而退不復再仕焉然  
則其辭也非故辟而其出也非營私矣  
其出處之大既如此則其餘可推也耳嚮者  
著地方大概以述經地治民之要今者作古

事記讀本而闡皇道之奧余嘗請先  
生得其地方大概全本今又遠寄讀本以  
徵余一言案伏讀之考據精確言有淵  
源其所注解亦簡明核備大益學者抑  
先生今年年既七十有八其學古通今之  
餘溢為著編者猶如此焉則其愛古憂  
今之志老而益確可亦概見也嚮者



大詔煥發大明古道以啟民心天下皆知  
皇道不可不講則如此書者在今日豈可少  
焉也哉乃不敢辭不文書以弁之云爾

明治二十四年九月

正七位内藤趾叟謹序

鷗雨小川貢書

緒言三則

一 外人來て吾國の歴史を問ふ。茫茫然として答ふる能はず。豈耻の大なるものといはざるを得んや。交際頻繁の今日。我國人にして。我國の歴史を知らざるべからず。然ども。古事記の如き。支那文を以て之を記し。之を讀むに。吾國の古言を以て。傍訓を附したり。讀むに煩はしく。解するに苦しむ。因て子弟のため。其傍訓の古言を直書し。標注を以て。其繁畧を解釋せり。

一 讀者校合のため。可及的。本書の支那字を存し。傍訓を施せり。詔謂言白答曰告。また久羅下那洲許袁呂許袁呂。



どの如し。

一 本記の文義語意と詳知せんと欲せば。本居翁の古事記傳。平田氏の古史傳に就て研磨すべし。因て二書の卷次と頁數とを頭書し。その搜索に便す。

標古事記讀本

播磨 加藤高文 謹撰

神代卷

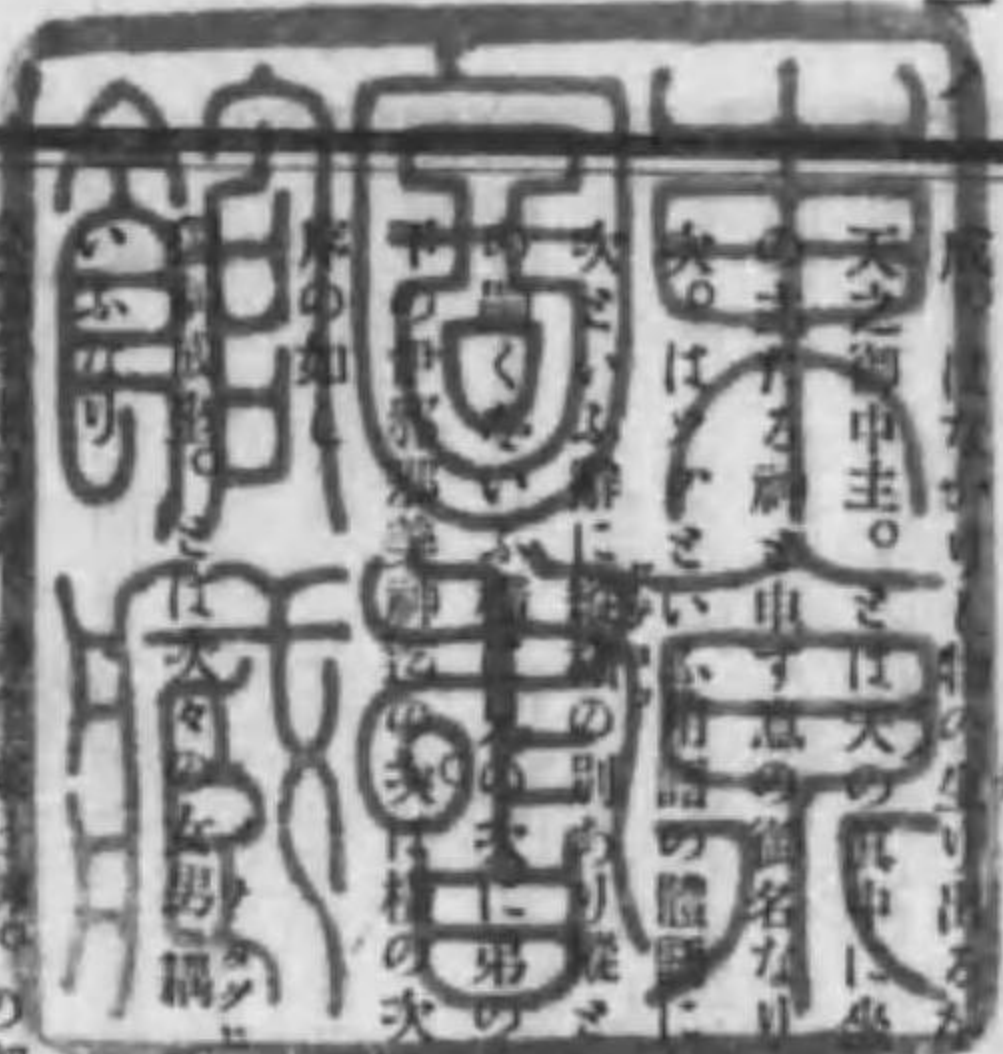
天地初發之時高天原に成ませる神名は

天之御中主神 次に

高御産巢日神 次に

神産巢日神

此三柱の神者並獨神成坐して御身を隠し給ひき



記傳三ノ  
一史傳一ノ

記傳三ノ  
十八傳一ノ  
四十二ノ

高天原は則天なり  
天之御中主。是は天の真中に坐して世の中  
大なる神を申す。此の神名なり  
此の神は、天の御中主の御名なり。此の神は、天の御中主の御名なり。此の神は、天の御中主の御名なり。  
次に、高御産巢日神の御名なり。此の神は、高御産巢日神の御名なり。此の神は、高御産巢日神の御名なり。  
次に、神産巢日神の御名なり。此の神は、神産巢日神の御名なり。此の神は、神産巢日神の御名なり。  
三柱とは古は神をも人も數へては幾柱といへり  
國稚。ワカシとは凡て物のいまた成調さ  
るをいふ  
浮脂の如く。此段は天地の成る始めをたさへ  
たるにて紀の一書には其狀觀難言さもあるか  
如し

次に國稚く浮脂の如くにして。久羅下那洲多陀用幣琉時に。葦牙の如萌騰れる物に因て成ませる神の名は

標注 古事記讀本 神代卷



葦牙。は葦の少し生へ初めたるをいふ  
崩騰。は水草の莖又葉の出そめたるを芽といふしモエの約りたるなり

宇麻志阿斯訶備比古遲神。天之常立神。の御名の義は記傳に詳なり

別天神。は天上に成ませるを別なる神として分けたるなり

野々口隆正曰隱身。始め御形ありて後に御身を隠し給ひしに非ず素より靈神に坐ますか故にカクリミニマスと訓むへしカクリミは現身の反對なりといへり

此國之常立神より伊邪那美之神迄十二柱の成りませる由縁はいかにいふに先つ上なるアシカビヒコゾ。天ノトコタチ二柱の神は天の始めなる葦牙の如くなるものに因て成まして天津神なり次に國の常立より以下の神等は彼浮脂の如くなる物の中地なるへき物に因りて成ませるなり

ウヒヂニの神よりオモタルアヤカシコ子の神迄は女男雙ひませるを以て女神を妹と申すなり嫁の事はいまた始まらざる時なれば妻の謂には非ず

宇麻志阿斯訶備比古遲神 次に  
天之常立神

此二柱の神亦獨神成坐て。御身を隠し給ひき  
上件五柱の神者別天神

次に成ませる神の名は  
國之常立神 次に

豊雲野神

此二柱の神亦獨神成坐して。御身を隠し給ひき  
次に成ませる神の名は

宇比地邇神次に妹 須比智邇神  
次に

角代神次に妹 活代神  
次に

意富斗能地神次に妹 大斗乃辨神  
次に

淤母陀琉神次に妹 阿夜訶志古泥神  
次に

伊邪那岐神次に妹 伊邪那美神  
上の件國之常立神より以下。伊邪那美神以前。并せて神

世七代と稱す 上の二柱は。獨り神各一代と云す。次に雙  
びます十柱は。各二柱を合せて一代と云す

此十二柱の神の内初め二柱は獨神成まし次十柱は女男二柱つゝ耦ませれば只十二柱の神世と申ては其種分れ難き故に後の世嗣の例に準へて假に七代と申せるなり

妹は古へ夫婦にまれ兄弟にまれ他人とちりまれ男と女と雙ふ時に女をさしていふ稱なり  
平田篤胤曰ウヒヂニ。スヒヂニ。の神といふよりイサナキ。イサナミ。の神まで男女二神つゝ雙ひ坐る十神は實はイサナキ。イサナミ。二柱の神のみにてウヒヂニ。スヒヂニ。よりオモタル。カシコ子といふまではイサナキ。イサナミ。の神の御身のやうくに成ませる状を以て次々に御名を貢せ奉れるを終に五代と歸り續たる事と覺えたり其はウヒヂニ。スヒヂニ。と申す神實に坐ましたらんには天つ神の國土を修め固めん事は此二柱にこそ命せ給ふべけれ。然るにいはてなる二神に。命を給へる事道理に叶はずといへり

於是天つ神諸の命以て。伊邪那岐命伊邪那美命三柱の神に。此多陀用幣流國を。修理固めなせと詔ごちて。天の沼矛を賜ひて。言依し賜ひきを  
故二柱の神天の浮橋に立して。其沼矛を指下して畫給へ

記傳三ノ  
卅八

一 史傳四ノ

一 記傳四ノ  
一 史傳二ノ  
十五



沼矛。は玉梓といふ如く玉以て飾れる矛なる  
へし

天といふ言を添て呼ぶ事は御孫命の天降りま  
しい時御從の神等の持し物なと凡て此國の  
物と別ちて天の某と叫びしなり紀には復此云云あり

言依。さば事を其人に依任て執行はしむる意なり紀には勅任ともあり  
據コナロノ。さば矛もてかき給ふに隨ひて湖のやうく凝りゆく状なり

オノゴロ島。は私記に自凝之島也猶如言自凝也さあり他の島國は皆二神の生給へるに此島のみは自らなればなり  
此記の文法すべて一連の語終りて次の語の首には必於是とも故とも爾ともいへる此三の辭を用ひたるは只其所の語の勢に隨ひ調べに任せて  
置けるのみにして。必各異なる意のあるに非ず。されば故爾とも故於是とも。重ねて置るそれも同し事なり。今の假言にソコアといふ勢なる所なり

天の御柱。は即八尋殿の柱なり  
見立るの見は見送る見届なとの見にして軽く  
添たる言なり

八尋殿。此名木花之佐久夜毘賣の段に作二無  
戸八尋殿云々書紀神代卷にも須磨之上起八  
尋殿云々なとあり八尋は廣きほをいへる  
にて八は七八と數ふる八にはあらず。古へ妻  
問するは先つその屋を建し事見え。須佐之  
男命の須賀の宮作も妻コミニ八重垣ツクルと  
詠しなり

汝身。ナカミと訓へし。上ツ代の歌にも多く  
ナミと訓み那兄那泥汝妹。汝命など多し其本は  
尋む人にもいへる稱なり

詠。をノリ玉ヒツラクと訓むは續紀に詠賜  
都其久云々あり

生成。は只生む事なり  
此天の御柱を行廻りて。こは上ツ代の大禮と  
見えたり

ミトノマケハヒ。ミトは御所なりマケハヒは  
男女目を見合すをいふ則交合なりアナニヤシ  
エ。何事にまれさし當りて切に思ゆるをアナ  
といふニヤシは二てふ言にヤシといふ詞を添  
へたるなりエは紀の一書に可愛と書て此云哀  
と見え本書には可笑一書には尊とあり此等に  
て其意明なり

ナトコナ。終りのナはヨといふに通ひて男  
女よといはんか如し下に哀を添て讀むは語の  
調を助んさなりエトコナ。の哀に同じし  
不真。は宜しの反にして宜しからずといふ言  
なり。○クミドは夫婦隠り寝る所をいふ。○  
オコス。は男女交合するをいふ

水蛭子。ひるに似たる兒を稱しなり御子の名  
にはあらず。○淡島。アハメ墨み給ひし故に  
淡島と名付しなるへし

天神は上の件に天神諸とありしと同じく初の  
五柱の神なり

フトマニウラヘテ。は玉垣の宮の段にもあ  
り紀に太古此をフトマニといふとありフトは  
布刀詔戸布刀玉などのフトにて稱へ辭なりマ  
ニはいかなる意にいかんと思ひ得ずと傳には  
いへり。ウラヘテはト合合面といふ事なり

記傳四ノ  
卅七  
一史傳三ノ

は。鹽許袁呂許袁呂邇畫鳴て。引上給ふ時に。其矛の末より  
垂落る鹽。累積て島と成る。是淤能若呂島なり

○天神諸命以を舊印本及元元集よは諸命以とあり諸命はオホ  
ミコトと訓むべくて其義もよく通ずと吾友青柳高瀬が説なり

其島に天降まして。天の御柱を見立。八尋殿を見立給ひき  
於是其妹伊邪那美命に。汝が身者いかに成れると問給へ  
ば。吾身は成成て成合ざる處一處ありと曰し給ひき

爾伊邪那岐命詔給ひつらく。我身は成成て成餘れる處一  
處あり

故此吾身の成餘れる處を。汝が身の成合ざる處に刺塞て。  
國土生成さんとおもふは奈何にと詔給へば。伊邪那美命  
然善けんとい給ひき

爾伊邪那岐命。然者吾と汝と是天の御柱を行廻り逢ひて。  
美斗能麻具波比爲と詔給ひき

如此いひ期りて。乃ち汝者右より廻り逢へ。我は左より廻  
り逢むと詔給ひ。約竟て廻ります時に。伊邪那美命。先つ阿  
那邇夜志愛袁登古袁と言給ひ。後に伊邪那岐命。阿那邇夜  
志愛袁登賣袁と言給ひき

各言給ひ竟て後に。其妹に女人袁言先だちて不良と曰給  
ひき。然共久美度に興して。子水蛭子を生給ひき。此子は葦  
船に入て流し去つ。次に淡島を生給ひき。是亦子の例にハ  
入らず

於是二柱の神議給ひつらく。今吾生りし子不良ず。猶天神  
の御所に白すべしと宣給ひて。即ち共に參上りて。天神の  
命を請給ひき

爾天神の命以て。布斗麻邇にト相て詔給ひつらく。女言先

標注 古事記讀本 神代卷

五



天神の命を請ふことは上の件の状態を天神に申給ひていかし侍らんと伺ひ給ふなり  
天神の命以ては天神の仰にてさいはんが如し

淡道之穂之狹別島

伊豫之二名島

愛比賣

飯依比古

大宜都比賣

建依別

隱伎之三子島

筑紫島

白日別

豐日別

建日向日豐久士比泥別

建日別

伊伎島

伊豫 岐 粟 土左

筑紫 豐國 肥國 熊曾國

だちしに因て不良。亦還り降りて改言へと詔給ひき  
故爾反り降りまして。更に彼天の御柱を先の如。往廻り給ひき

於是伊邪那岐命。先つ阿那邇夜志愛袁登賣袁と言給ひ。後に妹伊邪那美命。阿那邇夜志愛袁登古袁と言給ひき  
如此言給ひ竟へて。御合まして子淡道の穂之狹別の島を生給ひき。次に伊豫之二名島を生給ふ。此島は身一にして面四つあり。面毎に名あり。故伊豫國を愛比賣といひ。讃岐國を飯依比古といひ。粟國を大宜都比賣といひ。土左國を建依別といふ。次に隱伎の三子島を生給ふ。亦の名は天之忍許呂別。次に筑紫の島を生給ふ。此島も身一にして面四つあり。面毎に名あり。故筑紫の國を白日別といひ。豐國を豐日別といひ。肥の國を建日向日豐久士比泥別といひ。熊曾國を建日別といふ。次に伊伎島を生給ふ。亦の名は天比

津島 佐度島 大倭豐秋津島 大八島國

此島者身一而。さは四國一島なるをいふ

有四面四さは四ツに分れたるをいふかく人の如く身さいひ面さいふは次に三ツ子の島なごもいひ又山にも項。腹。御富登なごもいふ類なり此國々の名義は傳及び國號考等に詳なり

兒島

小豆島

大島

女島

智詞島

兩兒島

六島

還りましし時。は上の八島を生廻りて水のオノゴロ島の方へ返り給ひしをいふなり

此八島六島の名も其國御魂の神の名もふは御事なり此は只其島國をさしていへる名なり扱其名の女男ある所以はいまだ知らず

肥前

大事忍男 石土毘古 石巢比賣 大戸日別 天之吹男

自吉備兒島至天兩屋島并六島

既に國を生竟へて。更に神を生ます。故生ませる神の御名は大事忍男神次に石土毘古神を生まし。次に石巢比賣神を生まし。次に大戸日別神を生まし。次に天之吹男神を生



大屋毘古  
風木津別  
大綿津見  
速秋津彦  
速秋津姫

合十柱

本房宣長曰此十柱の神はもと彼御社の時に成  
ませる神等の一の傳へなりしを亂れて此記に  
はこゝさかしこに重りし物なりといへり記傳  
に詳なり

沫那藝

沫那美

頼那藝

頼那美

天之水分

國之水分

天之久比奢母智

國之久比奢母智

合八神

持而。さば同じみなさの内を河に流れる方さ  
海に流れる方さ二柱の神の別て持ますをいふ  
神の名の義は傳に詳なり

志那都比古

久々能智

大山津見

野椎

合四神

右神の名義は傳に詳なり

注に并四神。さあるは此前後の神等さ一連ならず此は伊邪那伊邪美の大神の生ませる神なるを佐神の間に擧たる故取分て結へるなり上の速秋

津比賣の下に并十神といへるも是に同じ

まし次に大屋毘古神を生まし。次に風木津別之忍男神を  
生まし。次に海神名は大綿津見神を生まし。次に水戸神名  
は速秋津日子神。次に妹速秋津比賣神を生ましき

自大事忍男神至秋津比賣神并十神

此速秋津日子速秋津比賣二柱の神。河海に因て持別て。生  
ませる神名は沫那藝神次に沫那美神次に頼那藝神次に頼  
那美神。次に天之水分神次に國之水分神次に天之久比奢  
母知神次に國之久比奢母智神

自沫那藝神至國之久比奢母智神并八神

次に風神名は志那都比古神を生まし。次に木神名は久久  
能智神を生まし。次に山神名は大山津見神を生まし。次に  
野神名は鹿屋野比賣神を生まし亦の名は野椎神と謂す

自志那都比古神至野椎并四神

此大山津見神野椎神二神。山野に因て持別て生ませる神  
名は天之狹土神。次に國之狹土神。次に天之狹霧神。次に國  
之狹霧神。次に天之關戸神。次に國之關戸神。次に大戸惑子  
神。次に大戸惑女神

自天之狹土神至大戸惑女神并八神

次に生ませる神名は鳥之石楠船神。亦の名は天之鳥船と  
謂す。次に大宜都比賣神を生まし。次に火之夜藝速男神を  
生まし。亦の名は火之炫毘古神と謂し。亦の名は火之迦具  
土神と謂す。此子を生ましすにより。美蕃登炙えて病臥せり。  
多具理に生ませる神名は。金山毘古神。次に金山毘賣神。次  
に屎に成ませる神名は。波邇夜須毘古神。次に波邇夜須毘  
賣神。次に尿に成ませる神名は。彌都波能賣神。次に和久産

此大山津見神野椎神二神。山野に因て持別て生ませる神  
名は天之狹土神。次に國之狹土神。次に天之狹霧神。次に國  
之狹霧神。次に天之關戸神。次に國之關戸神。次に大戸惑子  
神。次に大戸惑女神

自天之狹土神至大戸惑女神并八神

次に生ませる神名は鳥之石楠船神。亦の名は天之鳥船と  
謂す。次に大宜都比賣神を生まし。次に火之夜藝速男神を  
生まし。亦の名は火之炫毘古神と謂し。亦の名は火之迦具  
土神と謂す。此子を生ましすにより。美蕃登炙えて病臥せり。  
多具理に生ませる神名は。金山毘古神。次に金山毘賣神。次  
に屎に成ませる神名は。波邇夜須毘古神。次に波邇夜須毘  
賣神。次に尿に成ませる神名は。彌都波能賣神。次に和久産

天之狹土  
國之狹霧  
國之狹霧  
天之關戸  
國之關戸  
大戸惑子  
大戸惑女

合八神

上の件水分神より次々皆天之國之。といふは  
只二柱並ひます神の名を對へて稱たるまてに  
て天と國とに殊なる意は有へからず  
惑子惑女ともし書るは借字のみなり惑のヒを古へは正しく唱へしなり故に此字を借りてヒコロメに用ひたりヒフをイウの如く呼ぶは後の世の音便  
にして正からず

次生。こは野椎神の次に是より又イサナキ  
イサナミの神の生ませるなり

火之迦具土神以上三柱の御名ヒノと訓むへき  
例なりホノと訓むは誤なり

美蕃登。は御臥なり

病臥。はヤミコヤセリと訓せり臥をコヤスと  
いふは古言なり

多具理。は紀に爲吐と書り俗に歐氣をセ  
ケリといひ咳をタケルといふ

神遊坐。この神てふ言は神集神祝神遊神議な  
さの神にて凡て神の御上の事に付いふ言なり

此大山津見神野椎神二神。山野に因て持別て生ませる神  
名は天之狹土神。次に國之狹土神。次に天之狹霧神。次に國  
之狹霧神。次に天之關戸神。次に國之關戸神。次に大戸惑子  
神。次に大戸惑女神

次に生ませる神名は鳥之石楠船神。亦の名は天之鳥船と  
謂す。次に大宜都比賣神を生まし。次に火之夜藝速男神を  
生まし。亦の名は火之炫毘古神と謂し。亦の名は火之迦具  
土神と謂す。此子を生ましすにより。美蕃登炙えて病臥せり。  
多具理に生ませる神名は。金山毘古神。次に金山毘賣神。次  
に屎に成ませる神名は。波邇夜須毘古神。次に波邇夜須毘  
賣神。次に尿に成ませる神名は。彌都波能賣神。次に和久産



神參拾伍神。此數誰も疑ふ事なり大事忍男  
より悉く數ふれば四十柱なり石土毘古石葉比  
賣を一柱とし速秋津日子速秋津比賣を一柱と  
し大戸感子大戸感女を一柱とし金山毘古金山  
毘賣を一柱とし波瀨夜須毘古波瀨夜須毘賣を  
一柱として數ふれば三十五柱なりかくヒコヒ  
メと並びますを一柱と數ふる事故あるへし

那邇妹。は紀履仲卷に鳥カヨフ羽田の汝妹者  
云々汝妹此をナニモといふとあり  
子之一木に易ツルカモ。此御言はうつくしみ  
思はず妹の命を一人の子に替て神さりませ  
つる事よと悼みをしめ給へるなり

御佩。ミハカセルと訓むは立るをタセルと  
いふ類にて自ら尊む辭と聞ゆ  
十拳劍。はトツカツルキと訓むへしツカは四  
の指を並たる長さをいふ下に揃とも書き紀に  
は握の字を書たり

御刀。は紀に御刀此をミハカシといふとあり  
御執し給ふ弓をミトラシといふに同じ  
ユツ石ムラ。紀には五百箇磐石と書り五百を  
約めてユといへりユツ柱ユツ爪櫛なども枝の  
多く櫛の繁さをいふムラは群の意なり  
御刀木。紀には劍鐔とあり今ツバといふ物  
なり

瀧。はクバといふ事なり

陰。ミホトと訓へし

シギ山。は繁木山といふ意なり

羽山。紀に麓此をハヤマといふとあり

戸山。は門山の意にてトヤマなり

築日神。此神之子を豐宇氣毘賣神と謂す。彼伊邪那美神者  
火神を生ませるに因て。遂に神遊坐しぬ

自天鳥船至豐宇氣毘賣神并八神

凡伊邪那岐伊邪那美二柱の神。共に生ませる島壹拾肆  
島。神參拾伍神。こは伊邪那美神いまた神さりませりし以前に生  
まじつ。只おのころ島は生ませるならず。又姪子と

淡島とも御子  
の例に入らず

故爾伊邪那岐命詔給とく。愛しき我が那邇妹の命や。子の  
一木に易つるかもと謂給ひて。御枕方に匍匐ひ。御足方に  
匍匐て哭給ふ時に。御涙に成ませる神は。香山の畝尾の木  
の本にます。名は泣澤女神

故其神遊坐し、伊邪那美神は。出雲國と伯伎國との塚。比  
婆の山に葬しまつりき

於是伊邪那岐命。御佩せる十拳劍を抜て。其子迦具土神の  
御頸を斬給ふ

爾其御刀の前に著る血。湯津石むらに走り就て成ませる  
神名は。石折神次に根折神。次に石筒之男神。次に御刀の本  
に著る血も。湯津石村に走就て。成ませる神名は。饒速日神  
次に樋速日神。次に建御雷之男神。亦の名は建布都神。亦の  
名は豊布都神。次に御刀の手上に集る血。手俣より漏出て。  
成ませる神の名は。關淤加美神。次に關御津羽神

上件石折神より以下。關御津羽神以前并て八神者。御刀  
に因て生ませる神なり

殺させまし、迦具土神の頭に成ませる神名は。正鹿山津  
見神。次に胸に成ませる神名は。淤藤山津見神。次に腹に成  
ませる神名は。奥山津見神。次に陰に成ませる神名は。關山  
津見神。次に左の手に成ませる神名は。志藝山津見神。次に  
右の手に成ませる神名は。羽山津見神。次に左の足に所生  
神名は。原山津見神。次に右の足に所生神名は。戸山津見神



黄泉國。はヨモツクニミ調へしヨミは死し人の往て居る國なり  
トノド。は紀の崇神卷の歌にミヲノトノドミあり三輪之殿戸なり

黄泉戸喫。まはヨミの國の窟にて煮炊たる物を食ふをいふ此ヨモツヘケヒの穢にて還ります事能はざる由なり  
我那勢命。まは男神のアカナニモノ命と詔へるに對へて女神の男神に申し給ふ稱なり  
御美豆良。は上つ代に男の御裝にて髪を左右に分て結つかれたるものなり  
湯津々間櫛。ツマはカツマの上を略けるなりカツマは堅津間にて櫛の齒の繁くて間の堅くせまれるをいへり  
一つ火。紀に今世人忌一片之火一又夜忌レ櫛レ櫛此其縁也とあり  
宇士。は蛆の字を訓來れり蛆は蠅の子なり

自正鹿山津見神至戸山津見神并八神  
故斬給へる刀の名は。天の尾羽張といふ。亦の名は伊都の尾羽張と謂ふ

於是其妹伊邪那美命を相見まよく欲して。黄泉國に追往ましき。爾殿騰戸より出向へます時に。伊邪那岐命。語らひ給はく。愛しき我那邇妹命。吾と汝と作れりし國。いまだ作り竟ずあれば。還りまされと詔給ひき

爾伊邪那美命の答給はく。悔しきかも速く來まされず。吾者黄泉戸喫しつ。然共愛しき我那勢命。入來ませる事。かしこければ。還りなんを。まづ具らかに黄泉神と相論はん。我をな見給ひそ。かく白して。其殿内に還り入坐る間。甚久しくて待かね給ひき  
故左の御美豆良に刺せる。湯津津間櫛の男柱。一つ取闕て。一つ火燭して。入見ます時に。宇士多加禮斗呂岐豆。御頭

タカレ。今の世の語に凡て鳥虫などの物に多く集るをタカルといふ但そはヲリレと活く調なるを此はレ。ル。と活く格なり  
トロキヤテ。といふはトロケテといふに同じ  
盪淫譚などの字をトラカスと訓むもトロケサスといふ言なり  
大雷。火雷。黒雷。拆雷。若雷。土雷。鳴雷。伏雷の八雷神は傳に詳なり凡て雷は伊邪那美大神の大御身になりてヨモツ國より起る物なり甚く怒りて死し人なごの後に雷になりてむくいする事昔も今も多きは是なり  
野見。耻を興ふるを耻見すといふは古語なり  
紀にも令レ蓋レ音。なごあり  
ヨモツシコノ。紀に泉津醜女と書て醜女此をシコメといふとあり名義は形のおそろしく見にくきなふ

黒御鬘。頭の飾に懸るものなり蒲の子生れるに付ておもへは此鬘のさま蒲菟葛に似て玉を垂たるが彼實のなれる形にや似たりけん色の黒かりけんも彼實によくあるにや蒲子紀には蒲菟とあり和名エヒカツラノミとあり  
笋。和名タカムナとあり  
且後。此且はマタと訓むへし  
千五百。は只多きを大方にいふなり  
黄泉軍。はヨモツイタサと訓へしイタサまは軍士をいふ稱なり戦をイタサといふはいと後の事なり

には大雷居り。御胸には火の雷居り。御腹には黒雷居り。御陰には拆雷居り。左の御手には若雷居り。右の御手は土雷居り。左の御足には鳴雷居り。右の御足には伏雷居り。并せて八雷神成居りき

於是伊邪那岐命。見畏みて。逃返ります時に。其妹伊邪那美命。吾に辱見せ給ひつと言給て。即豫母都志許賣を遣はして。追はしめき

爾伊邪那岐命。黒御鬘を取りて投棄給ひしかは。乃ち蒲の子生りき。是を撫ひ食む間に。逃行ますを猶追ひしかは。亦其右の御美豆良に刺せる。湯津津間櫛を引闕て。投棄給へは。乃ち筭生りき。是を抜食む間に。逃行ましき  
且後には。かの八種の雷神に。千五百の黄泉軍を副て。追はしめき



後手。手を後さまへ回らして物するなり  
布伎。は振なり  
投棄。八千矛神の御歌に投棄をメキウテと讀  
給へり。スミウと音通す

ワツシキ青人草。紀に顯見蒼生。此をワツシ  
キアチ人クサといふとありて顯ならぬ神に向  
へて顯れたる世の人をいふ事あり

身自。ミミヅカラと訓べし上のミは御なり  
千引石。紀に千人所引磐と書れたるは稱の意  
を顯はせるなり

引塞。ヒキサへと訓べしサへは令レ障なり  
度事戸。コトドチヲマスと訓むし紀には此  
絶妻之誓と書て此をコトトといふとあり  
千頭。千人といふべきをかく詔ふは絞るに  
付たる言なり同し事を次には千人死といへる  
に合て思ふへし

香。アレハヤと訓べしこは白樺原段大御歌に  
アレハヤエマとある語勢に似たればなり  
上の殺をウロサナこの立をタテトナと訓べ  
しそは中巻皇熊王歌にカツキセナラとあるは  
潜せん我はなり紀崇神卷歌にイデトユカナ

史傳六ノ

は出て行んなりこれらムといふへきをナとい  
ふ古語の一ツの格なり  
シキシ。は及しなり

黄泉戸は即彼ヒラ坂をいふて紀には泉門とあ  
る如く黄泉國に入門なり

記傳六ノ  
卅七  
史傳  
廿四

伊那。は辭否なごに同じ言にてこは惡み  
眼ふ御言なり

シユメ。上の志許賣と別にて是目幸目など  
いふ目なり紀に言と書れ上と別なりメキは  
ひらめくひしめくなどいふめくにて其さまを  
いふ辭なり

御身。はオホミマと訓へし身は古言にムとも  
多くいへればマともいひし  
アハギハワ。紀に徳原と書て此をアハギと  
いふとあり地名にはあらで松原檜原などの類  
なるへし

御衣。はミソといふ古言なれ猶ミケシと訓  
へし  
御禊。和名抄に袴はハカマとあり是なり又禊  
はスマシモノ。チヒサキモノ。などありかく分  
ていふは後の事にて本は袴も禊も只ハカマな  
るへし

爾御佩せる十拳劔を抜て。後手に布伎つゝ。逃來坐るを。猶  
追ひて。黄泉比良阪の阪本に到る時に。其阪本なる桃の子。  
三つ取て待撃給ひしかば。悉に逃返りき

爾伊邪那岐命。桃子に告給はく。汝吾を助しがごと。葦原の  
中つ國に所有宇都志伎青人草の。苦瀨に落て。患惚む時に。  
助てよと告給ひて。意富加牟豆美命といふ名を賜ひき

最後に其妹伊邪那美命。身自追來ましき  
爾千引石を。其黄泉比良坂に引塞へて。其石を中に置て。相  
對立して。事戸を度す時に。伊邪那美の命。言給はく。愛しき  
我那勢の命。かくし給はゞ。汝の國の人草。一日に千頭絞り

殺さな。と申給ひき  
爾伊邪那岐命。詔給はく。愛しき我那邇妹命。汝志かし給は  
は。吾はや一日に千五百産屋立てなど詔給ひき。是以て一  
日に必千人死。一日に必千五百人なも生るゝ

故其伊邪那美命を。黄泉津大神と謂す。亦かの追しきしに  
よりて。道敷の大神と申共云り。亦其黄泉の阪に塞れりし  
石は。道反の大神とも號し。塞ります黄泉戸の大神とも謂  
す

故其所謂黄泉比良阪は。今出雲國之伊賦夜坂とも謂ふ  
是以伊邪那岐大神詔給はく。吾若伊邪志許米志許米岐穢  
き國に到りて在けり。故吾者大御身の禊せなど詔給ひて。  
竺紫の日向の橋の小門の阿波岐原に到まして。禊祓給ひ

き  
故投棄る御杖に成ませる神の名は。衛立船戸神。次に投棄  
る御帯に成ませる神の名は。道之長乳齒神。次に投棄る御  
裳に成ませる神の名は。時置師神。次に投棄る御衣に成ま

せる神の名は。和豆良比能宇斯能神。次に投棄る御禊に成  
ませる神の名は。道侯神。次に投棄る御冠に成ませる神の

名は。道侯神。次に投棄る御冠に成ませる神の



手纏。和名抄にタマキ一にいふ小手なりとあり

此神等の御名の義は傳に詳なり

記傳六ノ  
五十四

詔。ノリコチ玉ヒテと訓むへしノリコトシのトシを切めてチさいふなり  
隨の字は降の誤なるへし  
カツキ。は水の中に入る事にて滑字を書けり  
八十福津日神。大福津日神。八十は福の多きを云大は甚しきをいふ  
繁國の繁はシキの借字にて醜の意なり万葉に小屋之四忌屋爾とあり

名は。飽昨之宇斯能神。次に投棄る左の御手の手纏に成せ  
せる神の名は。奥疎神。次に奥津那藝佐毘古神。次に奥津甲  
斐辨羅神。次に投棄る右の御手の手纏に成ませる神の名  
は。邊疎神。次に邊津那藝佐毘古神。次に邊津甲斐辨羅神  
右の件船戸神より以下。邊津甲斐辨羅神以前十二神は。  
御身に著る物を脱棄給ひしに因て所生る神なり  
於是上瀨者瀨速し。下瀨者瀨弱しと詔給ひて。初めて中瀨  
に隨迦豆伎て。滌ぎ給ふ時に。成ませる神の名は。八十福津  
日神。次に大福津日神。此二神者。かの穢き繁國に。到まし、  
時の汚垢に因て。成ませる神なり。次に其禍を直さんとし  
て。成ませる神の名は。神直日神。次に大直日神。次に伊豆能  
賣神。次に水底に滌ぎ給ふ時に。成ませる神の名は。底津綿  
津見神。次に底筒之男命。中に滌ぎ給ふ時に所生神の名は。  
中津綿津見神。次に中筒之男命。水の上に滌ぎ給ふ時に所

記傳六ノ  
七十二  
七十四

祖神はオヤカミと訓へし上ツ代は父母に限ら  
ず世世經ても遠祖迄をオヤカミといへり  
子孫はスエと訓むへし其子孫なとあるを皆ス  
エと訓へきなり中昔も今もしかいふなり

天照大御神。テラスと訓へしこは天を照すこ  
いふと少し異りて唯テラスといふを延てテラ  
スといふ古言の格にて天に坐して照り給ふ意  
高光といふに同じ大の字延住本には皆太と  
書くはさかしらに改めつるなり又常に大御を  
尊きて大神と書けとも万葉。續紀。式の祝詞な  
とにも多く大御神とあり

須佐之男神。スサを書紀に素盞と書するに  
りてツと唱ふるは誤なりこゝに御目と御鼻を  
洗ひ給へる事のみ見えて御目と御耳との事は  
見えぬばいかにいふに彼所の物味まされは  
御口は固よりけられざるへし御耳にはイサナ  
ミの命の御言を聞まし又雷の聲なと聞つらめ  
と凡て聲には穢のなきなるへし  
貴子。ウツミコと訓へし玉鬘に珍は貴なりと  
注せり  
御頸珠。古は男女ともに玉を鬘に貫きて頭に

生神の名は。上津綿津見神。次に上筒之男命  
此三柱の綿津見神は。阿曇の連等か祖神と以いつく神な  
り。故阿曇の連等は。此綿津見神の子宇津志日金折命の子  
孫なり。其底筒之男命。中筒之男命。上筒之男命。三柱の神は  
墨江の三前之大神なり  
於是左の御目を洗ひ給ひし時に。所成神の御名は天照大  
御神  
次に右の御目を洗ひ給ひし時に。所成神の名は月讀命  
次に御鼻を洗ひ給ひし時に。成ませる神の名は建速須佐  
之男命  
右の件八十福津日神以下。速須佐之男命以前。十四柱の  
神者。御身を滌ぎ給ふに因て。生ませる神なり  
此時伊邪那岐命。大く歎喜して詔給はく。吾者御子生み生  
みて。生の終に。三柱の貴子得たりと詔給ひて。即其御頸珠

記傳七ノ  
一  
史傳七ノ  
六

標注 古事記讀本 神代卷



も頭にも手足にも衣にも凡て飾りしなり  
母由良。は緒に貫ける玉の動きて相觸つゝ鳴  
るさまをいふ。是は辭なり母も辭なりといへ  
り。○記傳には母は眞の意にやとあり  
天照大御神の尊き御事は傳七ノ七丁に詳ふり  
夜之食國。チヌ國とは御孫命の知しめす此天  
の下をすべしふ稱にしてチヌは本物を食ふ事  
なり扱物を見るも聞も知も食も嘗たの物を身  
に受入るゝ意伊へに見ずもきこすも知らずも  
食すも相通しいふ事多くして君の御國を治め  
たもちますをしらすもなすも聞しめすも  
いふなり  
各々。オノモクと訓へし己も己もの義なり  
八拳須心前に至るまでとは成長なりまして  
かゝる頃までといふ事也。噯イサチキ紀に哭泣  
悲憤ありきは語り辭なり谷川氏曰。猶言足  
摩而泣一也。小兒の泣りて泣く此狀ありといへ  
り  
枯山。は枯ノ字の意にして水草のなき山をい  
ふなるへし扱カレをカラといふは船の名枯野  
なとあり古言なり  
疾蠅。は田植る頃の蠅といふ意の稱なり  
ナス。は如クの古言なり  
滿ノ字。は滿の讀ならん  
何由以。はナニトカモと訓へし紀事傳卷の歌に  
ナニトカモ。ウツケレイモカ。とあるに依れり

の玉の緒母由良邇取ゆらかして。天照大御神に賜ひて詔  
給はく。汝命者高天原を所知と。事依して賜ひき。故其御頸  
珠の名を御倉板擧之神と謂す  
次に月讀命に詔給はく。汝命は夜の食國をしらせと。事依  
し給ひき  
次に建速須佐之男命に詔給はく。汝命は海原をしらせと。  
事依し給ひき  
故各々依さし給へる命の隨に。知ろしめす中に。速須佐之  
男命。所命給へる國を知らずして。八拳須心前に至るまで。啼  
いさちき。其泣給ふ狀は。青山を枯山なす泣からし。河海は  
悉に泣乾しき  
是を以て惡る神の音なひ。狹蠅なす皆滿き。萬の物の妖ひ  
悉に發りき  
故伊邪那岐大御神。速須佐之男命に詔給はく。何由以汝者。

トガメ詞なり  
イサチル。はイサツルなるへし落をオチル柄  
をクチルといふは皆傳言の格なり  
僕。ワレと訓むへしヤツケレなといふかかき  
は古言にばなし  
妣。は母なりへしと訓へし  
此母はイサナミの命をさして申給ふなり  
神ヤラヒニ。神とは凡て神の上の事に付てい  
ふ言にて神ヤラフはヤルを延ていへる詞なり  
此三柱の貴の御子神は伊邪那岐大神の御腹に  
よりに成まし伊邪那美命の生まれる神等には  
あらぬを妣と申給ふはいかにといふに彼御腹に成ませる神  
邪那美命を以て御母とするなり ○根の堅洲國。根は下つ底に  
マカラム。凡てマカラムとは貴き所より退去るをいふマ  
マカラム。凡てマカラムとは貴き所より退去るをいふマ  
參上。マキノホリと訓むへし井をウさいひマ  
ウノホリ。マウタ。マウタといふは後に音便に  
轉れるなり  
動む。はさゝろきひゝく事なり  
纏。はマカシと訓むへし御髪を分結てミヅラ  
になし給ふをいふなり  
勾連は曲れる玉なり細く長き玉のやゝ曲れる  
を今も折々地の下より掘出る事あり  
ミスマル。は紀に御統と書て此をミスマルと  
いふとあり舊説に以承貫穿總括也とある意に  
て即スアルと語通せり

事依せる國を知らずして。哭いさちると。詔給へは。答し給は  
く。僕は妣の國根之堅洲國に罷らむと欲ふが故に。哭くと  
申給ひき  
爾伊邪那岐大御神。大く忿怒して。然らば汝此國にはな住  
そと詔給ひて。乃ち神夜良比爾夜良比賜ひき  
故其伊邪那岐大神者。淡海の多賀になも坐す  
故於速須佐之男命の言給はく。然者天照大御神に請し  
て罷なむと申給ひて。乃ち天に參上ります時に。山川悉に  
動み。國土皆震りき  
爾天照大御神聞驚かして。我那勢の命の上り來ます由は。  
必善しき心ならじ。我國を奪はむと欲すにこそと詔給ひ  
て。即御髪を解き。御美豆羅に纏かして。左右の御美豆羅に



ソビラ。は背平也紀に背と書けり  
 千入。紀には千箭と書て此をチノリといふと  
 あり  
 靱。は盛レ箭室と字書に見ゆ  
 伊都。紀に稜威と書て此をイツといふとあり  
 向股。私記に兩股是正相向故云二向股とあり  
 ○踏ナツミ。は萬葉十三に夏草ヲ履ニ莫  
 積云々とあり夏草に履きて浸るをいふされは  
 御足を堅き地に踏入て御股まで地に浸るをいひて御刀剛く勇しくますをいふ  
 沫雪。は只雪の事なり其状の沫に似たる故にいふなり ○願散。紀に願散此をクエハラトカスといふとありクエといへる例は紀垂仁卷に常麻羅  
 速といふ人あり ○踏建。紀雄略卷に津麻呂開レ之踏叱日云々とあり ○扱御美豆良に懸かしてといふより踏建とといふまで而といふ言六つ重れ  
 り古文の格なり次の天石屋の段なごには猶多く重れいへり

も御髪にも左右の御手にも各八尺勾摠の五百津の美須麻  
 流の珠を纏持して。曾毘良には。千入之靱を負ひ。五百入之  
 靱を付け。亦伊都の竹靱を取佩して。弓腹振立て。堅庭は向  
 股に踏那豆美沫雪をす蹶散して。伊都の男建踏建て。待間  
 給はく。何故上り來ませると問給ひき

唯大御神。は伊都那伎大御神なり  
 神夜良比云々の下に爾てふ辭なき例も多し  
 異心。ケシキコトロと訓へし始に無邪心と白  
 して又こゝに無異心と白し給ふは今申しつる  
 事の由の外に別心はなしとなり

爾速須佐之男命の答白く。僕者邪心なし。唯大御神の命以  
 て。僕が哭伊佐知流事を問給ひし故に。白つらく僕は妣の  
 國に往らむと欲ひて。哭くと申し、かは  
 爾大御神。汝者此國にはな在そと詔給ひて。神夜良比夜良  
 比賜ふ故に。罷往なむとする状を申さむと欲ひてこそ。參  
 上りつれ。異心なしと申給へは。爾天照大御神。然者汝の心

清明。は二字合せてアカキと訓へし續紀に明  
 き清き直き誠の心をもてなとあり  
 天安川。は天上にある川なり  
 乞度は乞取といふか如しヲダスとは今は人に  
 やるをのみいへとも古は此方へ取るをいひ  
 しなり  
 三段。なミキダと訓むは和名抄筑前國鞍手郡  
 新分はニヒキタとある此分ノ字をキタといふ  
 に同じ豊後大分郡も本はオホキダなり  
 眞名井。マはほめ詞なりナは淳にて水の湛へ  
 たる所をいふされは只井をほめていへる釋に  
 て一ツの井の名にはあらず  
 佐賀美。は 聲を約めてサカミとほいふな  
 り堅き物をかめは口をしつむ謂なり  
 吹寒。紀に吹寒氣噴之吹霧此をフキワツルイ  
 フキノサキリといふとありワツルといへる例  
 は八千矛神の御歌に見ゆ  
 氣吹。はイキフキなりイとのみいふも即息な  
 り吹霧のサは眞と同意なり佐壯魂を眞男鹿と  
 いへるにて知へし

正勝吾勝々速日天之忍穂耳命。御名義傳に詳  
 なり

の清明は。何以知ましと詔給ひき。於是速須佐之男命。各宇  
 氣比て子生など答給ふ  
 故爾各天の安の河を中に置いて。宇氣布時に。天照大御神。先  
 つ建速須佐之男命の。佩せる十拳劔を乞度して。三段に打  
 折て。奴那登母母由良爾。天の眞名井に振滌ぎて。佐賀美に  
 迦美て。吹棄る。氣吹の狹霧に。成ませる神の名は多紀理毘  
 賣命。亦の名は奥津島比賣命。次に市寸島比賣命。亦の名は  
 狹依毘賣命と謂す。次に多岐都比賣命  
 速須佐之男命。天照大御神の。左の御美豆良に纏せる。八尺  
 勾摠の五百津の美須麻流の珠を乞度して。奴那登母母由  
 良爾。天の眞名井に振滌ぎて。佐賀美に迦美て。吹棄る氣吹  
 の狹霧に。成ませる神の名は。  
 正勝吾勝勝速日天之忍穂耳命。亦右の御美豆良に纏せる  
 珠を乞度して。佐賀美に迦美て。吹棄る氣吹の狹霧に。成ま



神の御名に某耳と申す多く人の名にも多く耳は尊稱なり抄記に忍權根尊ともある穂は右に同じ根も耳といふ如き尊稱にて某根といふ例殊に多し

物實。はモノサ子と訓へし記には物根とあり我物。とは彼ミスマルの珠なり

詔別賜。とは五男三女いつれかいつれの御子といふ別はなきを今始めて物實を以て別け給ふなり

此御誓に三女五男の神尊の生れましたるを必夫婦交合されば子は生らぬものと思ふは神の道の奇蹟をおもはて尋常の理に迷へるなり

記傳七ノ  
六十一ノ  
史傳八ノ  
十八

記傳七ノ  
六十五

建比良鳥命。此に天菩比の命のみ其子を得せるは此神功ありて御名高ければなり此御名タケヒナトリ。アマヒナトリ。アマヒナアアとも諸書にありていつれもヒナなるを此記にのみヒラとありナとラと横に通ふ音なり

造。敏達巻に臣連二造ともありて二造は國造伴造なりと注せり扱其國造は諸國にて其國の上として其國を治る人といふ戸なり造は即彼伴造といへる者にして伴は部といふ三枝部なとの部なり部はムレを約めたるメに攝はしたる言なりければ造は諸部にて上として各其部を掌る人といふ戸なりされば二造同じ義にて名義は御臣なり ○倭滝知造。

滝知の訓はアマチなるへし今山邊郡に庵治といふ村あり是なるへし高市縣主。和名抄に大和國高市郡是なり ○三枝部未詳。連。はカハ子にてムラウと訓む群主の意群の申の主といふ意ならん直は紀にアマヒエと訓る所あると和名抄和泉國和泉郡の郷名に山直であるを合せてアマヘと訓へし名義未考エは兄なるへし姓氏錄に直は君をいふなりとあり

せる神の名は。天之菩卑能命。亦御髮に纏せる珠を乞度して佐賀美邇迦美て。吹棄る氣吹之狹霧に成ませる神の名は。天津日子根命。又左の御手に纏せる珠を乞度して。佐賀美に迦美て。吹棄る氣吹の狹霧に成ませる神の名は。活津日子根命。亦右の御手に纏せる珠を乞度して。佐賀美に迦美て。吹棄る氣吹の狹霧に成ませる神の名は熊野久須毘命

於是天照大御神。速須佐之男命に。告給はく是後に生ませる五柱の男子は。物實我物に因て成ませり。故自ら吾御子なり。先に生ませる三柱の女子は。物實汝の物に因て成ませり。故乃ち汝の御子なり。かく詔別給ひき。故其先に生ませる神。多紀理毘賣命は

胸形の奥津宮に坐す。次に市寸島比賣命は。胸形の中津宮に坐す。次に田寸津比賣命は胸形の邊津宮に坐す。此三柱

の神は胸形の君等が以伊都久三前の大神なり

故此後に生ませる五柱の子の中に。天菩比命の子建比良鳥命

次天津日子根命者

- 凡河内國造 領田部湯坐連 木國造 倭田中直
- 山代國造 馬來多國造 道尻岐閉國造 周芳國造
- 倭滝知造 高市縣主 滿生稻寸 三枝部造
- 等の祖なり



遠江國。トホツアフミと訓へし此國には古へ湖ありしを以て此名を貢へり近江國の京に近きに對へて遠きはいふなり扱其湖は明應の頃甚く地震て地切れて南の海に連きしとなり其切たる所を今切といふ

凡河内國。即河内國ふり凡は紀安國推古帝なごに大河内とも書て大の意なり名義は後の京にて山代大河川の此方にある國なればなり

額田部。湯坐。紀原宗卷に倭國山邊郡額田邑和名抄平群郡額田田。河内國河内郡額田なごありこれらは姓又人名より出たる地名地名より出たる姓名か詳ならず

木國造。即紀伊國なり。○山代國造。即山城國なり。○馬來田國造。和名抄に上總國多末字郡とあり

道尻岐閉國。此地名陸奥にありげに開ゆれとも物に見へず。○周芳國。即周防の國ならん

古は凡て道奥國岩城國常道仲國なごいへる如く國の中なる地の小名をも同じく國といひしを郡とせられしはや、後の事なり扱郡となりて後にも國といひし事吉野國難波國初瀬國なごの類なり

記傳八ノ  
十一

我勝。紀に故妻妻鳴命既得勝驗とあり。但紀には男子を生給ふを以て心のあらしめ給ふを今はかく女子を得給ふを以て其驗とし我勝ぬと申給ふは傳への意の異なるなり

勝佐備。進む事をササヒといふ又それを約めてサビといへり進てあらふる意なり

大嘗。紀には新嘗とあり新嘗を以て娶するをいふ後世には踐祚大嘗を大嘗といひ毎年を新嘗と分ていへとも古は通はしいひて同し事なり

屎まり。マリは大小便をする事なり

營田。ミツグダと訓むへし營田。高田。なご營の末にみゆ

阿。は時なり和名抄には時は田界也和名久呂一云阿世とあれとも古はアとのみいへり

地をあたらしき。古書共に情ノ字をアアラシと訓めり此御言は田なるへき地を賣して時を作り流を掘りて置くは可憎しき事そさおもひて時をも

爾速須佐之男命。天照大御神に白給はく。我心清明故に。我生めりし子手弱女を得つ。此に因て言さば。自ら我勝ぬといひて。勝佐備に。天照大御神の營田の阿離ち溝埋め。亦其大嘗聞しめす殿に屎より散しき

故まかすれども。天照大御神は。どがめずて告給はく。屎なすは。酔て吐散すところ。我那勢の命かく爲つらめ。又田の阿はなち溝埋るは。地をあたらしき。我那勢の命。かく爲つらめと。詔直し給へども。猶其惡しき態止ずて轉あり

史傳九ノ  
廿二

記傳八ノ  
十七

豎ら流をも埋めて皆田にせんとのしわざにこそあらめさいふ意なり

轉。はウタテアリと訓むへしこは本よりある事の變進みて殊に甚しくなるをいふ言なり

本居日須佐之男命既に御誓に因て御心のあかし事疑ひな上懸るに忽又かくの如く天照大御神の御爲に種々の悪事をなし玉ふはいかにそやこは紀の中の一つの傳に右の種々の悪事始めにありて扱石屋の事より此神に解除を科せてやらひと事ありて後天照大御神に相見給はんとして高天原に上り給ひて御誓の事あり此次第一こそ誠に然るへしといへり

忌服屋。イミハタヤと訓むへしイミとせば神御衣をふる屋なる故に萬を盡み償む故なり

項は。白幡原宮段に穿高倉下之倉項とありて共に棟なり

逆鱗。は尾の方より逆さまに皮を割くなり死。ミサセと訓へし

天石屋戸。は必しも實の岩窟にはあらし石は只堅きをいへるにて天之石位。天之磐船なごの類にて只尋常の殿をかくいへるなるへし閉。マテと訓むへし閉は閉たる戸に物を刺て固むるをいふ

常夜。さば常に夜のみにて晝なきをいふ往さは凡て年月日時の経行をいふこは晝なく夜のみにて時を經行なり紀神功卷にも時人曰。常夜行一也とあり

皆滿。諸本共に皆字なし寫脱せるなり滿は浦を誤れるなり上にいふが如し

思金神。名義は紀に時有高皇靈尊之思金神者有思慮之智とあり金は數人の思慮る智りを一人の心に兼持るの意なり

長鳴。さば凡て鶴は他鳥よりも鳴聲の長きも

天照大御神忌服屋に坐して。神御衣織らしめ給ふ時に。其服屋の頂を穿て。天の斑馬を逆剝に剝て墮入る時に。天の衣織女見驚て梭に陰上を衝て死にき。士。士。故於是天照大御神。見畏みて。天の石屋戸を開て。刺こもり坐ししき。雨高天原皆暗く。葦原中つ國悉に闇し。此に因て常夜往く。於是萬の神の聲は。狭蠅なす皆滿。萬の妖悉に發りき。是を以八百萬神。天安之河原に。神集ひ集ひて。高御産巢日神の御子思金の神に。思はしめて。常世の長鳴鳥を集へて。鳴しめて。天安の河之河上の天の堅石を取。天の金山の鐵を取りて。鍛人天津麻羅を求て。伊斯許理度賣命に科せて。



のなる故にいふなり  
聖石。紀雄器名に堅磐とあるを此をた  
しはさいふとあり後世の言ならばカタイシと  
いふべきをかくいふは古言の一格なり  
鏡人はカメチと訓むへし金ワチを約めたる名  
なり後にカゲさいふ此カメチの約りたるなり  
求。マギテと訓むへし此ハモトムの古言なり  
扱鏡をばイシコリドメノ命に作らしむとあれは此麻羅を求きて何物を作らしめむとてにか甚も心得たし此名の下に矛を作らしむるもの有り  
脱たる

史傳十一  
ノ十八

イシコリドメの造りし鏡は即下文なる八尺鏡なり  
科。はもと命の意にて仰命も同言なり科ノ字をよむは人々に事の品科を分ていひ付る意なり  
天香山。前に出たるは大和國なるないひ此の  
は天上なるないへるなり  
眞男鹿。紀に眞名鹿とあり眞はほめ辭なり  
内披。内は借字にて紀に全刺此をウツハキと  
いふとある全と同し俗に圓さいふ意なり  
波々迦。和名抄に朱櫻ハカ一云ニハザケラ  
とあり扱此木を取るは皮を燃して復鹿の肩骨  
を灼ん料なり  
麻迦那波しめ。紀欽明巻に等弓。占。撰射落  
嶽巻にも。撰。射とあり新撰字鏡に撰は  
設也度也マカナフとあり  
五百津眞賢木。イホツは枝の繁きをいふて一  
木の上の事なり眞賢木紀には眞坂樹と書けり  
共に借字なり  
根コシニコツテ。慎なから掘取るをいふ俗に

鏡を作らしめ  
玉祖命に科せて。八尺の勾璽の五百津の御須麻流の珠を  
作らしめて

天兒屋命。布刀玉命を召て。天香山の眞男鹿の肩を内披に  
抜て。天の香山の天の波波迦を取て。占合麻加那波しめて。  
天の香山の五百津眞賢木を。根許士爾許士て。上枝に八尺  
勾璽の五百津の御須麻流の珠を取著。中枝に八尺鏡を取  
繫け下枝に。白丹寸手青丹寸手を取垂て。此種々の物者。布  
刀玉命布刀御幣登取持して。  
天兒屋命。布刀詔戸言禱白して  
天手力男神。戸の掖に隠り立して

記傳八ノ  
二十

いふ根引にするなり  
八尺鏡。延佳が尺當レ作レ咫さいへるぞよき、  
は寫誤れるものなり尙傳に詳なり  
白丹寸手は楯。青丹寸手は麻なりニギテとは  
和純の義なりタへは絹布の類を總へいふ名  
なり  
取垂。垂をシテと訓本はシダレを約めたる言  
なり紀孝徳紀に垂此をシダレさいふとあり  
布刀御幣。フトはたへ辭ミテグラは何物に  
ても神に奉る物の總名なり  
登取持而。の登は辭なり。○布刀詔戸言。萬葉十七に中臣ノ。フトノリトコト。イヒハラヘとあり  
禱白而。子キマナシテと訓へしホケは祝禱の方にいひノムは乞祈方にいひネケは右の二ツを兼たる言なり  
伏汗氣而。ウケフセテと訓へし内の。空なるものを伏て拍子のためにするなり  
トハロコシ。は合ニ動ニナリコシさいふは開シメシキヨシメシさいふに同じく古言なり  
神懸して。は俗にいふ託宣なり今此段の神かりは物のつきて正心を失へる狀に佛優をなすをいふなり  
掛出。カキイテと訓むへしカキハ搦ノ字を書くと同じく手してする樂に付いふ辭なり  
上の神集集ひてとあるより神懸りしてとある迄而の字二十あり唯種々の事を並へ擧ぐとていへる辭なるへし古文の格なり  
咲字此は宇受賣命の佛優を見てをかしさに笑ふなればワラフと訓へしエラケと訓むへからず

天宇受賣命。天香山の天之日影を手次に繫て。天の眞折を  
鬘として。天の香山の小竹葉を手草に結ひて。天の石屋戸  
に汗氣伏せて。踏登杼呂許志神懸して。胸乳を掛出で。裳緒  
を番登に忍垂れき  
爾高天原動りて。八百萬の神共に咲ひき

記傳八ノ  
六十一

細開。ホソメニヒラキテと訓へし此メは所見  
の切りたる辭なり  
樂。アソビと訓むへし後世にも此段の樂を神  
遊さいへり古今集に見ゆ

於是天照大御神。怪と以爲して。天石屋戸を細開きて。内  
より告給へるは。吾隠りますに固て。天原自ら開く。葦原の  
中つ國も皆聞けんどもおもふを。何とて天の宇受賣は樂び  
し。亦八百萬の神諸咲ぞと詔給ひき



歡喜咲の三字をエラギと訓み樂の字をアツアと訓へしエラクとば咲。樂。樂むをいふ其鏡。は即上文の賢木に懸たる八咫鏡なり。情。は今の世の言に漸々にさいふ意なり

臨は。字鏡にウカマフ又ノゾムとあればノツムと訓へし引出書紀には引而奉出と書たり。尻久米繩。は今いふシメ繩なり

記傳九ノ

千位置戸を負せ。是解除を科するをいふ凡ハラレに二ツあり其一は伊邪ナキの大神のアハキ原の禊祓の如し一ツはこの解除の如し是罪ある人に科せて物を出し贖するなり

千位。紀には千座と書けり私記に座者是置物之名也とあり。此處書紀一書に長雨ふりて宿とひ給ふに。神等宿りて甚く辛苦つ。降給ふ事あり此次の又字の上にかる類ひの事ありしが脱たるなるへし續記傳に詳なり

大氣津比賣神。は食物の神にますが故に乞給ふなり。味物。タメツモノと訓へし古凡て美味飲食をいへる名なり

爾天の宇受賣。汝命に益りて貴神坐すが故に。歡喜咲樂と云しき。かく言間に。天兒屋の命。布刀玉命。其鏡を指出て。天照大御神に示奉。時に。天照大御神逾奇と思して稍戸より出て。臨坐す時に。其隠立る天の手力男の神。其御手を取て引出しまつりき。即布刀玉の命。尻久米繩を其御後方に控度しき。此より内にな還り入ましそと白言き。故天照大御神出坐る時に。高天原も葦原の中。國も自ら照明りき。於是八百萬の神。共に議りて速須佐之男命に。千位置戸を負せ。亦鬚を切り。手足の爪をも拔しめて。神夜良比夜良比

又食物を。大氣津比賣の神に乞給ひき。爾大氣都比賣鼻口又尻より。種々の味物を取て。種々作具へて。進る時に。速

六品の中に食ふべき物五品は昔穴に生り置一品は穴ならぬ所に生れる事又口に生れる物なきは故あるにや

ヤラハエテ。此語は必上の神ヤラヒヤラヒキ。ノ下に續きて有へき事也若此處にあらは故の下に速須佐男命はさいふ言あるべし。よからされは神ムスヒの神のヤラはれ給ふ如く聞ゆる也。かゝれば大氣津比賣神の御事此上に出たるはさにかく疑しくなん

肥の河上。和名抄に出雲國大原郡斐伊とあり。鳥髮地。風土記に仁多郡鳥上山郡家東雨三十五里伯耆與出雲之堺とあり

須佐之男命。其態を立伺ひて。穢汚奉進ると爲して。乃其大宜津比賣の神を殺し給ひき。故所殺給へる神の。身に成れる物は。頭に蠶生り。二つの目に稻種生り。二つの耳に粟生り。鼻に小豆生り。陰に麥生り。尻に大豆生り。故是に神産巢日御祖の命。茲を取らしめて。種となし給ひき。故避追はえて。出雲國の肥の河上なる。鳥髮の地に降りましき。此時著其河より流下りき。於是須佐之男命。其河上に人ありけりと以爲して。尋覓上り往まし。かは。老夫と老女と二人在りて。童女を中に置いて泣なり。汝等は誰ぞと問給へば。故其老夫僕者國つ神。大山津見神之子なり。僕名は足名椎。妻が名は手名椎。女が名は櫛名田比賣と謂と答す。亦汝の哭由は何ぞと問給へば。我之女者本より八稚女在き。是高志の八俣遠呂知なも。年毎に來て喫なる。今それ來ぬべき時なるが故に泣くと答白す。其形は如何さまにか







首。私記に患部首腫。於比止。さあり本尊稱にて大人の意なるべし

記傳九ノ五十

神大市比賣。上に神と置くは稱名なり

八島士奴美神

布波能母遲久奴須奴神

深淵之水夜禮花神

淤美豆奴神

天之冬衣神

大國主神

亦の名

大穴牟遲神

葦原色許男神

八千矛神

於是彼足名稚の神を喚して。汝者我宮の首九れと告言給ひ。且名を稻田の宮主須賀の八耳の神と。負せ給ひき。故其櫛名田比賣を以て。久美度に起して。生ませる神の名を八島士奴美神といふ。又大山津見神の女。名は神大市比賣に娶て。子大年神。次に宇迦之御魂神を生ませしき。兄八島士奴美神。大山津見神の女。名は木花知流比賣に娶て。生ませる子。布波能母遲久奴須奴神。此神淤迦美神の女。名は日河比賣に娶て。生ませる子。深淵之水夜禮花神。此神天之都度閑知泥神に。娶て生ませる子。淤美豆奴神。此神布怒豆怒神之女。名は布帝耳神に娶て。生ませる子。天之冬衣神。此神刺國大神之女。名は刺國若比賣に娶て。生ませる子。大國主神。亦の名は大穴牟遲神と謂し。亦の名は葦原色許男神と謂し。亦の名は八千矛神と謂し。亦の名は宇都志國

玉神と謂す并て御名五つあり

宇都志國玉神 御名の意は穴はナの假字ムはモの轉れるにて大名持なり 凡て名の弘く長く聞ゆるを譽とすれば天皇の宮所を遷し給ひ御子おはしまさぬ后又御子等は御名代の氏を定め給へり此命は天の下を作り治め給ひ御名の世に勝れたれば大名持さほめ稱へ申せるなり 此神の事。紀に須佐之男神。櫛名田比賣に御合まして生兒大已貴神とあり。こは凡て上代には遠祖までをかけて皆オヤといひ子孫末々までをかけて皆子といへば此も須佐之男神の御子孫と云意にて御子と申傳へつるより混れし傳へなるべし其故は此記に右の如く世々の神の御名さだかに見えて六世の孫なる事いと著明ければなり。且紀の一書には八島孫五世孫は即大國主神なりと見え又一書にはスサノヲノ尊所生兒之六世孫是曰大已貴命と見え姓氏録にも素佐能雄命六世孫大國主とあり

記傳十ノ一 史傳十七

八十神。は只多きないふ都八十柱と限れるに非ず 昔國者云々。は後の事を先づいひ置て次にその然る由をいふなり 稻羽。は因幡の國なり

アカハダナル。菟の毛のなきをいふ

將爲者。センハと訓へし可レ爲機はさいはんか如し

故此大國主神の兄弟。八十神坐しき。然共皆國は大國主の神に避りまつりき。避りまつりし所以は。其八十神各々。稻羽の八上比賣を婚はむの心ありて。共に稻羽に行ける時に。大穴牟遲神に借を負せ。從者として率て往き。於是氣多の前に到ける時に。裸なる菟伏せり。八十神其菟に言けらく。汝將爲は。此海鹽を浴み。風の吹に當りて。高山の尾上に伏てよといふ。故其菟八十神の教ふる從にして伏き。爾其鹽乾く隨に。其身の皮悉に風に吹折し故に。痛て泣伏れば。最後に來ませ



淡岐島。は隱岐國なり

族。トモカラと訓むへし  
アリノコト。有る限り遠きすこいふ意な  
リ  
讀度。ヨムは數ふるなり万葉に日月乎數而  
あり

我衣服。毛の付たる皮をいへり

る大穴牟遲神。其菟を見て。何由汝泣伏ると問給ふに。菟答  
言。僕淡岐島に在て。此地に度らましく欲つれども。度らむ因  
なかりし故に。海の和邇を欺きて言けらく。吾と汝と族の  
多き少きを競てむ  
故汝者。其族の在の悉率て來て。此島より氣多の前ゆで。皆  
列伏し度れ。吾其上を踏て走つゝ讀度らむ。於是吾族と孰  
れ多きといふ事を知らむ。かく言しかば見欺て列伏りし  
時に。吾其上を踏て讀度り來て。今地に下むとする時に。吾  
汝は我に見欺つと言竟れば。即最端に伏せる和邇。我を捕  
へて。悉に我衣服を剥き。此に因て泣患ひしかば。先だちて  
行ましく。八十神の命以て。海鹽を浴て風に當り伏れと誨  
給ひき

故教の如せしかば。我身悉に傷えつと告す。於是大穴牟遲神。  
其菟に教へ告そく。今急此水門に往て。水以て汝身を洗ひ

本草注云蒲黃。蒲花上黃者也和名加末乃波奈  
差は愈なり

如本也。モトノ如クニナリキと訓へし此藥方  
の物に見えたる始なり紀に大已貴命與ニ少彦  
名命ニ戰力一心經ニ營天下ニ復爲ニ顯見蒼生及畜  
産ニ則定ニ其意レ病之方ニあり  
其菟白云々此言の如く八上比賣を大穴牟遲神  
の得給へるは此菟の靈ちはひけるなるへし

記傳十ノ  
十四  
史傳十七  
ノ十六

八十神。此前に聘せし事のあるへきを其をば  
畧きてたゞに其答をいへる何さかや言足らぬ  
こゝちす  
將嫁。アハナと訓へし

手間山。伯耆國會見郡天萬羅と和名抄に見ゆ

追下。八十神の下るなり取るは大穴牟遲神の  
待取るなり  
御祖神。は大穴牟遲神の御母なれば刺國若比  
賣なり

て。即其水門の蒲黃を取て。敷散して。其上に輾轉ては。汝身  
本の膚の如。必差なむものぞと教給ひき。故教の如爲しか  
ば。其身本の如くなりき。此稻羽の素菟といふ者なり。今  
に菟神と名もいふ。故其菟大穴牟遲神に白さく。此八十神  
者。必八上比賣を得給はし。倍を負給へれども。汝命を獲給  
ひなむと白しき  
於是八上比賣。八十神に答けらく。吾者汝等之言は聞かじ。  
大穴牟遲神は嫁などいふ  
故爾八十神怒りて。大穴牟遲神を殺さむと共議て。伯伎國  
の手間の山本に至て云けるは。此山に赤猪在るなり。故和  
禮共追下りなは汝待取れ。若待取ずは。必汝を殺さむとい  
ひて。猪は似たる大石を火もて焼て。轉し落しき  
爾追下り。取る時。其石は燒著えて死給ひき。爾其御祖命  
哭患ひて。天よ參上りて。神産巢日之命よ請給ふ時。乃菟



記傳十ノ  
二十四ノ  
史傳十七  
ノ二十四

蠶。は蠶と書るを誤れるなりキサガヒと訓へし。給貝。ウムギと訓へし紀景行天皇卷に白蛤を贈りに作りて奉りし事見ゆ是をウムギと訓めり。作イカサシメ。の作は繕ひ治るなり。岐佐宜。は今世の言に物をコソケルといふは此キサガの訛れるにて意同ト。○集。は賀茂翁の考に魚字の誤なりコガシと訓べしといへり。○母乳汁云々。は彼蠶貝の魚野を蛤の水以てこきて母乳汁を塗る如くに塗しなり。○アルキト。中古の物語文などにアリクとのみ見えたりはアリクといふぞ雅言の如く聞ゆれどそは却て後なり。

新字と氷目矢との詳ならざるによりて凡ての事の状も定め難しと本居翁はいはれたり此は今世に木を割るに用ふる矢あるへし。大屋毘古神。は五十猛神と一ツなるべし。覓道。は跡を尋て追行なり。矢刺。射んさて矢を弓にかくるをいふ。自木侯。こは暫く大樹の下に隠れ居て其木の俣より脱出て遁れ去り給ふなり。

貝比賣と蛤貝比賣とを遣せて作り活さしめ給ふ。爾蠶貝比賣。岐佐宜集て。蛤貝比賣水を持て。母乳汁と塗しかは。麗壯夫となりて出遊行き。

於是八十神見て。且欺きて山より率て入て。大樹を切伏。矢を茹め其木より打立。其中より入らしめて。即其氷目矢を打離て拷殺しき。爾亦其御祖の命。哭つて求けは。見得て。即其木を拆きて。取出で活して。其子に告給はく。汝此間よりあらは。遂より八十神より滅させなむと詔給ひて。乃木の國の大屋毘古神の御所より。速し遣給ひき。爾八十神覓追臻りて。矢刺す時に。木俣より漏逃れて去給ひき。

四十四

須佐能男命は根の堅洲國にやはれて今は既く彼國に坐すなり。蛇。タマカリと訓むへし只はかる事なり。蛇宮。公蜂室などてあるはいかなる故にか。若は根の國なれば人の苦なす物の類ひ見て多かるにや。蛇比禮。蛇の身のヒレといふにあらす蛇を拂ふヒレなり。其妻。既に一度相婚ましつるからにはや妻といへり。其夫。はウツネヒコと訓へし夫をヒコと訓へし事下に見ゆ。自靜。とは起立て喚ばんとせし蛇の退き靜りて何てふ苦をなまきりしなり。來日。は翌日といふ。平出。ヤスガ出給ヒキと訓べし此は寢をば上に做はせて略けるなり。給といひ吳公。蜂といひ此野を曉廻す事といひ種々に苦しめ給ふ所以は彼八十神の如く實に苦はんの御心には非ず此神の勇怯又智愚を試み給はんとなるべし。

御祖命子に告給はく。須佐能男命坐す。根堅洲國に參向てよ。必其大神議給ひなむと詔給ふ。故詔命の隨。須佐之男命の御所に參到たりしかは。其女須勢理毘賣出見て。目合して相婚まして。還り入て。其父に甚麗しき神まゐ來つと言給ひき。爾其大神出見て。此者葦原色許男といふ神ぞと謂給ひて。即喚入て。其蛇の室屋に寢しめ給ひき。於是其妻須勢理毘賣命。蛇の比禮を其夫に授て曰給はく。其蛇喰はむとせば。此比禮を三度擧て打撥給へと詔給ふ。故教の如爲給ひしかは。蛇自ら靜りし故に。平寢て出給ひき。亦來日の夜は。吳公と蜂との室屋に入れ給ひしを。且吳公蜂の比禮を授て。先の如教給ひし故に。平出給ひき。亦鳴鏑射を大野の中に入て。其矢を採しめ給ふ。故其野に入す時に。即火以て其野を燒廻らしつ



記傳十ノ  
四十三

史傳十七  
ノ四十九

富良。は物の中の空處にして廣きをいふ洞な  
 是なり  
 内。とは鼠の穴の奥をいひ  
 外。とは其穴の入口をいふ  
 須夫。は草きなり  
 奉。オホナムヂノ神に獻るなり  
 喫。は上の昨と同しくて子鼠ごもの矢の羽の  
 方を共に助けて昨へ持來るなり喫ごのみいふ  
 て持を背けるは上にある故なり  
 製具。は裁せん料の具なり

家。は即須佐之男大神の御家なり  
 八田間云々。は廣く大なる謂なり田は都の轉  
 れるにて八箇間ナ  
 かゝる御頭に手を觸さずるも猶此神を試給ふ  
 なり  
 牟久木實。和名抄葉類に椋子和名本草に無久  
 と有赤土常に地字を書て結土なり黃土ともか  
 けり  
 唾。は津吐の意なるへし  
 こは椋子を咬みて含たる赤土と和たるか吳  
 公を咬破りたるに能似たるなるへし  
 愛しく。はめでうつくしむ意こは火穴半遲  
 神の多かる吳公を觸も恐れず昨破り給ふと思  
 ひ其勇を感給ふなり

於是出む所を知らざる間に。鼠來ていひけるは。内は富良  
 富良。外は須夫須夫。かくいふ故に。其處を踏しかば。落入隱  
 りし間に。火は燒過ぬ  
 爾其鼠其鳴鏑を昨持出來て奉りき。其矢の羽は。其鼠子等  
 皆喫たりき

於是其妻須世理毘賣は。喪具を持て哭つゝ來まし。其父の  
 大神は。已に死訖と思はして其野に出立せば。爾其矢を以  
 て奉る時に。家に率て入りて。八田間の大室に喚入て。其頭  
 の鼠を取らせ給ひき  
 故其御頭を見れば。吳公多かり。於是其妻牟久の木實と赤  
 土とを。其夫に授給へば。其木實を昨破り。赤土を含有て唾き  
 出し給へば。其大神吳公を昨破りて唾き出すと。以爲して  
 御心に愛しく思して寢ましき  
 爾其大神の御髪を握て。其室の椋毎に結ひ著て。五百引石

生大刀生弓矢。は執持主の命長く生くべき徳  
 ある大刀弓矢なり  
 天詔琴。琴の名には非ず凡て琴の正しき木の  
 名也古はノリゴトさいひしなをコトとのみいふ  
 は後に畧ける名なり  
 拂。は俗に云つき當るなり  
 引。彼椋毎に御髪を結着たるをば知しめさ  
 でふと起立給ふ故に室の介るなり  
 黃泉比良阪。は顯國との境なれば大神此阪よ  
 り此方へ出給ふ事能はず  
 阪に御尾河に瀨といへるは只詞のあやにて實  
 は只坂と河なり  
 意禮。は人を殿め督る稱なり記申白檮原宮段  
 又日代宮段にも云へり今俗言に立おれ行おれ  
 なさいふも此のオレなるへし  
 大國主神名義は。天下を伏へてウシハク神  
 さいふ意なり  
 ウツシ國玉神。は國作る功業を成して天の下  
 に其恩顧を蒙らしむる神さいふ意なり  
 石根。は故に礎とするに非ず地底に素より  
 在る石根まで深く掘立るさいふ義なり  
 布刀。は廣く大きさいふ釋辭なり  
 高天原に。とは底津石根に對へて只高き事を  
 いふ古言なり  
 氷椋。は上代の家造りに屋の左右の端に有て  
 其本は前後の軒よりして上り椋にて行合ひ其

を其室の戸に取塞て。其妻須世理毘賣を負て。其大神之生  
 大刀生弓矢又其天詔琴を取持して。逃出ます時に。其天の  
 詔琴樹に拂れて地動鳴き。  
 故其所寢る大神聞驚して。其室を引付し給ひき。然ども椋  
 に結へる。御髪を解する間に。遠く逃給ひき  
 故爾黃泉比良坂迄追至まして。遙に望けて大穴牟遲神を  
 呼て日給はく。其汝が所持生大刀生弓矢を以て。汝が庶兄  
 弟どもをば。坂の御尾に追伏。亦河の瀨に追撥ひて。意禮大  
 國主の神と爲り。亦宇都志國玉の神となりて。其我女須世  
 理毘賣を嫡妻として。宇迦の山之山本に。底津石根に宮柱  
 布刀しり。高天原に氷椋多迦斯理て居れ。是奴よと詔給ひ  
 き  
 故其大刀弓矢を持て。其八十神を追避る時に。坂の御尾毎に  
 追伏せ。河の瀨毎に追撥ひて國作り始め給ひき

標注 古事記讀本 神代卷



末上へ出たるものないふなり。○タカシリ。只木の事のみならず其宮を去るし坐すをいふタカもフとも同じ稱言なり。國作。こは巻首に修理とある字の意なり。此ウカの山本の宮。は杵築の大社と別なるへし大國主命天の下を宇新波伎いませる程はこのウカの山本の宮に住ましけん。ミトアタハシツ。紀神代下巻に幸之雄畧巻に與ニ。夜二而。嬬なきありされは寄合て御覽處を興にし給ふ意ならん。幸て來。は因幡より出雲になり。返りますは因幡になり。

記傳十一ノ一史傳十九ノ五十三

八千矛神。は大國主神なり。高志國。は越國なり後には越前加賀能登越中越後など分れつれど歌には猶なべて越さよむなり。イデマシ。は行給ふないふ古言なり。神命は尊稱なり。妻。は紀神代巻に覺國此云ニクニマギニさあり宇治拾遺物語に人の妻まぐ者ありと云り。クハシメ。は麗女といはんが如し。

サヨバロニ。サは眞に通ふ言なりヨバロは万葉に結婚と書けり。アリカヨハセ。アリは万葉に有通有待有爲などあり。オスヒ。上代に男女共に人に誰とまれとて面靨を隠す料の服と見えたり。オソアラヒ。は押なり万葉四に誰そこの屋の戸をそぶるさあるアルと同じきを延ていふなり。ヒコツラヒ。は引なり。コセ子。は乞望意の詞。イシタフヤ。いかなる詞共いまた思ひ得ず歌ふ調へに添へていふ辭にて意はなきにや是より下五句は此次の歌にもあり又其終り三句は其次々の歌にも二所あり下巻朝倉宮段の歌にも見えて皆其歌の意にかいはらず只一首の結に添へていへる語なり。万葉十二にヒトクニ。ヨハヒニユキテ。タチガサモ。イマダトカチバ。サヨソアケル此歌の意を約めてよめるなり。サヌツトリ。ニハツトリ。いつれも冠辭なり。

標注 古事記讀本 神代卷

故其八上比賣は先の期の如美刀阿多波志都。故其八上比賣は。率て來ましつれども。其嫡妻須世理毘賣を畏みて。其所生御子をば。木の俣に刺挾て返りましき。故其御子の名を木俣の神と云す。亦の名は御井の神とも謂す。此八千矛の神。高志國の沼河比賣を婚ひに幸行し時。其沼河比賣の家にとりて歌曰。かみのみことば

やちほこの  
八千矛  
やしまらに  
八島國  
とほとほし  
さかしめを  
くはしめを  
ありたし  
ありかよはせ  
いまだとかずて  
いまだとかねは  
なすやいたとを  
わがたせれば  
わがたせれば  
ぬえはなき  
きしはとよむ  
かけはなく  
なくなるどりか  
うちやめこそね  
あまはせつかひ  
かたりことも

さよはひに  
よはひに  
たちがをも  
大刀之緒  
おすひをも  
をどめの  
おそぶらひ  
ひこづらひ  
あをやまに  
さぬつどり  
にばつどり  
うれたくも  
このどりも  
いしたふや  
ことこの  
ありたし  
ありかよはせ  
いまだとかずて  
いまだとかねは  
なすやいたとを  
わがたせれば  
わがたせれば  
ぬえはなき  
きしはとよむ  
かけはなく  
なくなるどりか  
うちやめこそね  
あまはせつかひ  
かたりことも



ナド。は平和なり今世の言に物の平和なる  
事をナドヤカもナド共いふ是なり此四  
句の意は今こそ逢がたくてかく浦洲の千鳥の  
如く心の騒ぐとも後には必逢見て心の平和へ  
きを今宵逢見ぬ事を深く恨みて戀死給ふな  
いふなり

記傳に曰此まで一首見えたり本より次の  
一ツ歌として記せるに非ず二首を連てしる  
るが後に一ツ歌の如く見ゆるなり  
カクレバさいふべきをカトラバさいふは古言  
の格なり  
烏玉。持綱之。皆冠辭なり

爾其沼河日賣。いまだ戸を開かず。内より歌ひ給はく

こをば  
やちほこの  
ぬえくさの  
わがこころ  
いまこそは  
のちは  
いのちは  
いしたふや  
ここの  
こをば  
あをやまに  
ぬほたまの  
あさひの  
かみのみこと  
めにしあれば  
うらすのとりぞ  
ちどりにあらめ  
なごりにあらむを  
なしせたまひそ  
あまはせつかひ  
かたりこども  
ひがかくらは  
よはいでなん  
あみさかえきて

沫雪。冠辭なり  
ヲカヤルム子ヲ。弱やかなる胸をさいはんか  
如し  
タマキ。俗にそと叩くさいふこさなり  
タキマナガ。胸を叩きつゝ互に抱くをい  
ふ  
ナコヒキコシ。はな懸ひ給ひそさいはんか如  
し常の格なるはナコヒキコシとあるへきを  
下のツてふ辭なきも古歌には例多し  
ウハナリチタミ。これは本つ妻の後妻を新む  
をいふ  
ヒコゾ。夫妻の事をいふ時に其夫をさしてい  
ふ稱なり

記傳十一  
ノ二十八  
史傳二十  
ノ一

故其夜は合す。明る日の夜御合し給ひき。又其神の嫡后。  
須勢理比賣命。甚く嫉妬し給ひき。故其日子遅神わびて。出  
雲より倭の國に上り坐さむとして。束装し立す時に。片御  
手は御馬の鞍に繫け。片御足其御鏡に踏入て歌曰

ぬほたまの  
くろきみけしを

たぐづねの  
あわゆきの  
そだき  
またま  
もくながに  
あやに  
やちほこの  
ここの  
こをば  
まろきたくむき  
わかやるむねを  
たくきまながり  
たまでさしまき  
いはなさんを  
なこひきこし  
かみのみこと  
かたりこども



胸見時。水鳥は頭を延居て己が胸を見る如く  
するものなるにたさへていふなり  
鷗鷗。ハハは中昔の物語書なごに神の波多又  
波多神なごありて袖の端をいふ此は左右の手  
を張り袖をたぐり揚て彼水鳥の胸見る如く昔  
着裝たる衣を見るをいふ

アタ子ツキ。茜音かそ契沖いへり和名妙に茜  
可三以染。辨者也和名阿加爾とありこれ辨色を  
染る料なるべし  
シメコロモ。染衣なりシメもソメも同じ言  
なり

まつぶさに	とりよそひ
おきつどり	むなみるとき
はたきぎも	こればふさはず
へつなみ	そにぬぎうて
そにどりの	あをきみけしを
まつぶさに	とりよそひ
おきつどり	むなみるとき
はたきぎも	こもふさはず
へつなみ	此亦不立
やまかたに	ろにぬぎうて
あたねづき	まぎし
志めころもを	ろめきがまるに
とりよそひ	まつぶさに
むなみるとき	おきつどり
	はたきぎも

イトコヤノ。妹さいはん冠辭を聞えたりイト  
ホシキコてふ事なりノヤはヤノを上下に寫し  
誤れる  
群鳥。引鳥。共に冠辭なり

ナカシトハ云々よりサギリニタムツ迄の意  
は今昔別れて後へ行ば今こそ強く泣けり  
いふことも必香を思ひて痛く泣つゝ歌かんぞ  
さいへるなり

若草之。冠辭なり

こしよろし	いとこやの
いものみこと	むらどりの
わがむれいなほ	ひけどりの
わがひけいなほ	なかくじは
なはいふども	やまどの
ひどもとすゝき	うなかおし
ながなかさまく	あさあめの
さざりに	たぐむぞ
わかくさの	つまのみこと
こと	かたりこと
こをば	

爾其后大御酒杯を取らして立依指攀て歌ひ給はく  
やちはこの  
あがほくに  
かみのみことや  
ぬしこそは

標注 古事記讀本 神代卷



ツマハナシ。古は夫婦互につまといひし  
アヤガキノ。物の形姿彩色なごせし帷帳な  
ごを云なるべし  
フハヤガシタニ。帷帳などの欄のフハリと掛  
りたる下にさいふなり  
サヤアカ。は清潔をいふ

をいませば 男坐者 うちみる 打見  
たまのさきさき 島之崎 かきみる 振見  
いそのちかおちす 磯之崎 不落 わかくこの 若草之  
つまもたせらめ 妻將持 あはもよ 吾者  
めにしあれは 女在者 なをきて 除汝而  
をばなし 夫者無 なをきて なをきて  
つまばなし 夫者無 あやかきの 文垣之  
ふはやがしたに ふはやがしたに むしおすま 蒸被  
にこやがしたに 柔之下 たくおすま 袴被  
さやらがしたに 清之下 あわゆきの 沫雪之  
わかやるむねを わかやるむねを たくづぬの たくづぬの  
まろきたむき 白肌 ろたき 甲  
たきまながり 叩 またまで 眞玉手  
たまでさしまき 玉手差 もこながに 股長

イナシナセ。は寐を宿よさいふ事なりシは助  
辭ナセは前歌のナサムと同意なり  
アヤガキノさいふよりイナシナセさいふ迄の  
意は永く此國に留り給ひて今より香むつま  
かにうまくれ給へさいふ其状を演たるなり  
タマツラセ。はレを延てラセさいふ古言の  
常なり此歌は飲給へさいふ意なり  
字伎由比。は蓋結にて女神男神互に蓋をさし  
かばして今より長く心變らト結び堅め給ふ契をいふなり今世までも契つたむる印には蓋を差かはす事するは神代よりの風儀なり  
ウナガケリテ。は項に手を掛て親しく並居るをいふ ○鎮座。此大神は倭へ行坐んさせしを思止りて永く出雲國に留り住給ふなり  
神語。は神の讀給へる歌さいふ意にいへるにはあらト上の沼河比賣を給ひ給へる御歌より此迄五首を總ていふなり。は夷振思國歌などいへる類  
にて右の五首を殊に神語と古よりいひ傳へしなるべし

いをしなせ いとよみき  
たてまつらせ 豊御酒  
かく歌ひて即字伎由比して。字那賀氣理豆。今に至るまで  
鎮り坐す。此を神語といふ

故此大國主神。胸形奥津宮に坐神。多紀理毘賣命に娶て。生  
ませる子。阿遲鉏高日子根神。次に妹高比賣命。亦名下光比  
賣命。此阿遲鉏高日子根神者。今迦毛大御神と申す神なり  
大國主神。亦神屋楯比賣命に娶て。生ませる御子事代主神  
亦八島牟遲能神之女。鳥耳神に娶て。生ませる子鳥鳴海神  
此神日名照額田毘道男伊許知邇神に娶て。生ませる子國  
忍富神

神屋楯比賣神  
事代主神  
八島牟遲能神  
鳥耳神  
鳥鳴海神  
日名照額田毘道男伊許知邇神  
國忍富神



葦那陀迦神

速甕之多氣佐波夜遲奴美神

天之甕主神

前玉比賣

甕主日子神

湊加美神

比那良志毘賣

多比理岐志麻流美神

比比羅木之其花麻豆美神

活玉前玉比賣

美呂浪神

敷山主神

青沼馬沼押比賣

布忍富鳥鳴海神

若賣女神

天日腹大科度美神

天狹霧神

遠津待根神

遠津山岬多良斯神

十七世の神今これを數ふるに十五世あれば此數に二世足らず今は知がたし

此神葦那陀迦神。亦の名は八河江比賣に娶て生ませる子速甕之多氣佐波夜遲奴美神

此神天之甕主の神女。前玉比賣に娶て生ませる子。甕主日子神

此神湊加美神の女。比那良志毘賣に娶て生ませる子。多比理岐志麻流美神

此神比比羅木之其花麻豆美神の女。活玉前玉比賣神に娶て生ませる子。美呂浪神

此神敷山主神の女。青沼馬沼押比賣に娶て生ませる子。布忍富鳥鳴海神

此神若賣女神に娶て。生ませる子。天日腹大科度美神

此神天狹霧神の女。遠津待根神に娶て生ませる子。遠津山岬多良斯神

神といふ

故大國主神。出雲の御大の御前に坐す時に。波の穂より。天之羅摩船に乗りて。鵝の皮を内剝に剝て衣服にして。歸來る神あり

爾其名を問すれども答へず。且所從の諸神に問すれども。皆知らずと白き

爾多邇且久白言。此者久延毘古ぞ必知りたらむと申せば。即久延毘古を召て問はす時に。此者神產巢日神の子。少名毘古那神なりと答白しき

故爾神產巢日御祖命に白上しかは。此者實に我子なり。御子の中に。我手候より。久岐斯御子なり

故汝葦原色許男命と。兄弟と爲りて。其國作り堅よと詔給ひき

故それより大穴牟遲と。少名毘古那と二柱の神相並はし

記傳十二ノ一史傳十八

御大ノ御前。出雲國の東北の極なり。天之羅摩船。アメノミ云ふは天の羅天の龍橋などの例なり。今カマラヒもカガイモもいひて其殼を剝たるは舟によく似たる者なり。鵝皮の鵝字。決めて誤なり。故延住は鵝字かといへり

多邇且久。且は具の誤なるへし。此は蟪の事なり

史傳十八ノ九

久岐斯。紀に吾生める御子すべて千五百座ある中にひさりの見いささかなくて。教ごにも順はず。指問より漏墮は必彼ならん。とあり。尙記傳に詳なり



常世國。一つの國あるにはあらずいづ方によれ遣に隔り離れてたやすく往還がたき所を認めくいふ名なり

記傳十二ノ十七

山田之曾富騰云々の文意。は當時クエビヨモ云ひしは即今世に至るまで山田のソホドモてあるものはなりといふ意なり奥義抄に田におごろかしに立たる人形なりといへり得作。エツクランと訓へし凡て得といふ辭の用格漢文は作る事を得。作る事を得すと訓めとも皇國語には得作らず又得云々せずといふ例なり  
光海云々。玉垣段に其肥長比賣惠光海原白船追來とあり  
我前。凡て古言に神に前といふ事多し天照大御神の詔に如し拜。吾前。伊都伎奉とあり  
能治。卷の末に僕住所者云々而於高天原。氷木多加新理而治賜者云々あると同じく宮を遣りて齋祀るを治といふなり  
大國主神曰云々の下と然者の上に然者汝者孰神耶答曰吾者汝之幸御魂奇御魂也といふ文のありけむ大國主神曰然者といふ七字の二つあるから見まがへて脱したるならんと記傳にいへり〇紀には是時大已貴神問曰然則汝是誰耶對曰吾是汝之幸魂奇魂也云々とあり

記傳十二ノ二十九

大國御魂神。いづれの神にまれ國を造らし功徳あるを其國々にて國魂とも大國魂共申して拜記る  
白日神。白字は向の誤にてムカヒなるへし

又。は大年神をいふ下なるも同じ

以拜。はモチイツクと訓へし  
電。和名抄に加萬とありカマドといふは電處なり古へ釜をカマといへる事なし釜はカナへ又マロガナへと和名抄に見えたり

用鳴鑼。用字は成又は化なとの誤か若し然らば鳴鑼になりませる神なりと訓へし  
奥津日子神より大土神迄は合せて十神なるに九神とあるは奥津日子奥津比賣を一神として計るなり

井十六神此數も右の例なり

て。此國作堅め給ひき。然後者。其少名毘古那神者。常世の國に度ましき

故其少名毘古那神を顯し白せりし。所謂久延毘古は。今に山田之曾富騰といふ者なり。此神は足は行かねども。天の下の事を盡に。知る神になもありける

於是大國主神愁まして。吾獨していかでかも此國を得作らむ。孰の神と共に。吾は此國を相作らましと。告給ひき  
是時に海を光して依來る神あり。其神言給はく。我前を能治めては。吾共與に相作り成てん。若然らずは國成難ましと。言給ひき

爾大國主神曰給はく。然者治奉らむ狀は。奈何ぞと曰し給へば  
吾をばも。倭の青垣東山の上に。伊都岐奉れと答言給ひき  
此者御諸の山上に坐す神なり

故其大年神。神活須毘神之女。伊怒比賣に娶て生ませる子。大國御魂神。次に韓神。次に曾富理神。次に白日神。次に聖

神五  
又香用比賣に娶て生ませる子。大香山戸臣神。次に御年神

柱二  
又天知迦流美豆比賣に娶て生ませる子。奥津日子神。次に

奥津比賣命。亦の名は大戸比賣神。此者諸人の以拜く電の神なり。次に大山咋神。亦の名は山末之大主神。此神は近淡海國の日枝の山に坐す。又葛野の松の尾に坐す。用鳴鑼になりませる神なり。次に庭津日神。次に阿須波神。次に波比岐神。次に香山戸臣神。次に羽山戸神。次に庭高津日神。次に大土神。亦の名は土之御祖神九  
上件大年神之御子。大國御魂神より以下。大土神以前并て十六神



大氣都比賣。上に見ゆ若其神ならば既に須佐之男命に殺され給ひしかば今は其御靈を鎮祭る社の神の現女に化りて娶ましましむなるへし

若山咋神。御伯父に大山咋神ます故に若さいふなり  
若年神。これも御祖父に大年。御伯父に御年神坐す故に若さいふ

葦原中國。は大御國の名にして豊てふ言の添へたるは始めて御子の命に事依し給ふ詔なれば祝てなり  
水穗。水は借字にてみづ／＼しきをいふ穗は船の穂なり  
天浮橋。は天より此國に下り上る道に架たる橋なり  
佐夜藝豆。は物の音の喧くさはがしきなり

高御産巢日神天照大御神之命以云々。凡てかかる詔命をいふに此二柱神をかくの如く列擧る所あり又高ミムスヒ神を擧きて只天照大御神のみを擧る所もあるは天照大御神は表にして高ミムスヒ神は裏なるが如くなればなり

道速振の解は冠辭考に詳なり  
荒振。は打聞えたる儀なり  
多在。サハオカも多カサも訓へしナルはニアルにて在の字に當る  
言趣。は背けるものを此方へ合し向意の言なり  
三年。ミトセも訓へし年を常にトシといふを其數をいふにはミトセ。ヤトセなさいふトセは年經なり  
此段の穗日命の尊眞淵淵の祝詞考。出雲國造神賀詞解に詳なり参考すべし  
ツカハシテバヨケン。のテバはたらばさいふ古言なりヨケン。は善からんといふに同じく古は此格いと多し

天若日子。紀の中に此神のみ神とも命ともいへる所一つもなし既しめたるあるへし  
アノノマカコヨ。アメノハ、矢。紀には天鹿兒弓。天羽々矢と書けり此紀の下に雉を射たる所には天之波士弓。天之加久矢といへり此は別弓矢かとも云べければ上を承て天神の賜へるさいへば同じ弓矢と聞ゆ

羽山戸神。大氣都比賣神に娶て生ませる子。若山咋神。次に若年神。次に妹若沙那賣神。次に彌豆麻岐神。次に夏高津日神。亦の名は夏之賣神。次に秋毘賣神。次に久久年神。次に久紀若室葛根神

上件羽山戸神の子若山咋神より以下。若室葛根神以前。并て八神

天照大御神の命以て。豊葦原之千秋之長五百秋之水穗國は。我御子正勝吾勝勝速日天忍穗耳命の所知國と。言因し給ひて。天降し給ひき  
於是天忍穗耳命。天の浮橋に多多志て。詔給はく。豊葦原之千秋長五百秋之水穗國は。甚く佐夜藝て有けりと告給ひて。更に還り上らして。天照大御神に請給ひき  
爾高御産巢日神。天照大御神の命以て。天の安河の河原に。八百萬の神を。神集に集へて。思金の神に思はしめて。詔給

はく。大國主神に請給ひき  
此葦原の中國は。我御子之知さん國と言依賜へる國なり。故此國に道速振荒振國神等之多在と以爲すは。何れの神を使してか。言趣ましと詔給ひき  
爾思金神。又八百萬の神等議りて。天菩比神是遣してむと白しき。故天菩比神を遣しつれば。乃て大國主神に媚附て。三年に於るまで。復り言奏さりき  
是以高御産巢日神。天照大御神。亦諸の神等に問給はく。葦原の中國に遣せる。天菩比神。久しく復言奏さす。亦何れの神を使しては吉けむ  
爾思金神答白けらく。天津國玉神の子。天若日子を遣てむと白しき  
故爾天之麻迦古弓。天之波波矢を。天若日子に賜ひて遣しき。於是天若日子其國に降到て。即大國主神の女下照比賣



雄名鳴女。雄はキトシと訓へし名鳴女は己が  
 名を呼んで鳴く意にて名鳴女とはいふなり又名  
 は鳴女と訓へきにや  
 扱此度の御使に於て雄鳥をしも遣て遣せしは  
 漢語共を見るに雄は物聞く事聴く又能介を守  
 る鳥なりといへればさる由にぞ有けんかし  
 詔之。此上に召し雄などいふ言のあるべき  
 になきは言を略けるなり  
 言趣和。和はヤハセと訓へし紀中多くありて  
 和平。平和とも見ゆ  
 鳴女。こゝは上に名字有しが脱たるにや  
 湯津楓。湯津は五百箇にて枝の多きをいふ  
 天佐具賣。紀に天探女此をアマノサクメとい  
 ふさ有他の心を探りて邪思多きなりといへる  
 意なるべし  
 天之波士弓。上にはアノノマカコ弓とありこ  
 こは體をいふ同し弓なり

記傳十三  
ノ二十五

を娶とし。亦其國を獲むと慮りて。八年に至る迄。復言奏さ  
 ざりき。天照大御神。高御産巢日神。亦諸の神等に問給はく。天  
 若日子久しく復言奏さす。又曷の神を遣してか。天若日子  
 が久しく淹留る所由を。問しめむと問給ひき  
 於是諸の神等。及思金神答白く。雉名鳴女を遣してむと白  
 す時に。詔之。汝行て。天若日子に問む状は。汝を葦原の中國  
 に使せる所以は。其國の荒振神等を言趣和せとなり。何や  
 八年に至るで復奏ささると問へと詔給ひき  
 故爾鳴女天より降到て。天若日子が門なる湯津楓の上に  
 居て。委曲に天津神の詔命の如言き  
 爾天の佐具賣。此鳥の言ことを聞て。天若日子に此鳥鳴音  
 甚惡し。故射殺し給ひぬと言進れば。即天若日子。天神の賜  
 へる天之波士弓。天之加久矢を持て。其雉を射殺しつ

天之加久矢。上にアメノハヤとあり此は用  
 をいへる名にて同し矢なり  
 天安河之河原。紀には只至高皇産靈尊之座  
 前とあり  
 或。二つともモシと訓へし  
 麻賀禮。凶くなれさいふ言にて意は則死れと  
 詔ふなり  
 胡床。後世の椅子なごの廣きものにや  
 高胸坂。は仰き臥たる胸の状の高きをいふ  
 頓使。萬葉に直土とあるも土のみにて物物を  
 まつへぬなりされば頓使は副使も從者もなく唯獨なるをいふならん  
 此諺にいひならはせる意は此雉の使の射殺されて還らざりしに因て人の世となりて凡て大事の使を遣るに副使從者などもなくて獨なるを雉の頓使  
 といふて思む事にせしなり頓使字をヒタてふ言に當るはいかなる由にか。字書にも其義見えず  
 風ノムタ萬葉に浪之共風之共なさいと多し

記傳十三  
ノ四十四

爾其矢雉の胸より通りて。逆に射上らえて。天の安の河の  
 河原に坐ます。天照大御神。高木神の御所に逮りき。是高木  
 神者。高御産巢日神の別名なり。故高木神其矢を取して。見  
 すれば。其矢の羽に血著たりき  
 於是高木神。此矢は天若日子に所賜し矢ぞかし。と告給ひ  
 て。諸の神等に示て。詔給はらくは。或天若日子。命を誤へず。  
 惡神を射たりし。矢の至つるならは。天若日子に中らされ。  
 或邪心あらは。天若日子此矢に麻賀禮と云給ひて。其矢を  
 取らして。其矢の穴より。衝返し給ひしかば  
 天若日子が胡床に寝たる。高胸阪に中りて死にき。亦其雉  
 還らず。此還矢可。故今に諺に雉之頓使といふ本是あり  
 故天若日子が妻。下照比賣の哭聲。風の與響て天に到りき

標注 古事記讀本 神代卷







記傳十四  
史傳二十一

天石屋。こは石もて搦へたる屋にぞあるらん  
彼天照大御神の隠らしし石屋とは異なるべし  
逆に塞上。川水を塞留て側の方へ引遣るをい  
ふ  
同。さは仕へ奉らんや否と問ふなり  
此道。さは葦原中國を意向に行事なにいふ漢文  
に此行なと云行字に當る  
貢進。さは此建御雷神を大御神の御許に奉進  
すなり  
天鳥船神。出雲國造神賀詞に天夷鳥命に布都  
怒志命乎副天天降。道而云々あるを思へ  
ば鳥船は船鳥を下上に誤れるならん  
伊奈佐之小濱。出雲國出雲郡因佐神社あり是  
なり  
銀の前。録なり  
跌坐。アケミ井と訓へし足を組むといふ事に  
て俗に丈六かくといふ坐禪なり  
カシハケル。は主として其處を我物と領居る  
ないふ

於是天照大御神詔給はく。亦曷の神を遣しては吉けむ。爾  
思兼神及諸神等白けらく。天安の河の河上の天石屋に坐  
す。名は伊都之尾羽張神。是遣すべし。若又此神ならずは。其  
神の子建御雷之男神此遣す應し。且其天の尾羽張神は。天  
の安の河の水を逆に塞上て。道を塞居れば。佗神は得行じ。  
故別に天の迦久神を遣して問べしと白しき  
故爾天迦久神を使して。天尾羽張神に問ふ時に。恐し仕奉  
らむ。然ども此道には僕子建御雷神を遣べしと答して。乃  
貢進りき。  
爾天鳥船神を建御雷神に副て遣しき  
是以此二神出雲國の伊那佐之小濱に降到て。十拳劔を拔  
て浪の穂に逆に刺立て。其劔の前に跌坐て。其大國主神に  
問給はく  
天照大御神。高木神の命以て問に使はせり。汝之字志波祁

記傳十四  
ノ八

史傳廿二  
ノ四十八

鳥の遊。は鳥を狩りて遊ぶないふ  
天逆手。伊勢物語に天の逆手を拍てなんのろ  
ひ居るなどあり古に逆手を拍て物を呪る術の  
ありしなり  
青柴垣。は青葉の垣をいふ。フシは字の如く柴  
の事なり  
隠ましき。青柴垣の内に隠り坐すといふなり  
此次に父の大神も八十桐手に隠りて侍らんぞ  
ある如く此神も同じく海底に入坐て現御身は  
永く隠れ給ふ事を含めたり  
手末。只手といふ事なり  
忍々。シヌアといふ音に懸シヌア。堪シヌ  
ア。隠シヌア。三ツの意あり此のは隠れ忍  
ふの意なり  
物言。此國を天神の御子に賦らんやと問に來  
つるをいふなり  
其御手。は建御雷神の御手ないふ

流葦原中國者。我御子の所知國と言依し給へり。故汝心奈  
何にぞと問給ふ時に。答白らく  
僕者得白さじ。我子八重言代主神。是白すべきを。鳥の遊取  
魚しに御大の前に往て。未還り來ずと白しき  
故爾天鳥船神を遣して。八重事代主神を徵來て。問賜ふ時  
に。其父の大神に。恐し此國者。天神の御子に奉り給へとい  
ひて。即其船を踏傾て。天の逆手を青柴垣に打成して隠ま  
しき  
故爾其大國主神に問給はく。今汝子事代主神かく白言。亦  
白すべき子ありや。と問給ひき  
於是亦白つらく。亦我子建御名方神あり。此を除てはな  
し。如此白し給ふ間。其建御名方神。千引石を手末に撃て來  
て。誰ぞ我國に來て。忍忍かく物言。然者力競せむ  
故我先其御手を取らむといふ。彼其御手を取らしむれば。

史傳二十  
三ノ一

記傳十四  
ノ二十



立氷。立たる氷なり初めに立氷になしたる御手な又更に銀及に變化なりこは建御雷神の靈しき徳を以て御名方神を感せる所爲なり退居。シヨクキナリと訓へし居は有と同格に活く言にて語の終りにてもナリといふなり古今集に陶走り火に心やけなり。とあり

記傳十四ノ三十六

且還來。は信濃より出雲になり。

既。は常にいふとは異にして此は悉皆さいふ意なり万葉に天の下すてにおほひてふも雪のさいふ歌あり

即立氷に取成し。亦劍刃に取成しつ故爾懼て退居。爾其建御名方神の手を取らむと。乞歸して取れば。若葦を取が如。搯批て投離ち給へば。即逃去き。故追往て。科野國の洲羽海に迫到りて。殺さむとし給ふ時に。建御名方神。白らく。恐し。我をな殺給ひて。此地を除ては。他所に行かじ。亦我父大國主神の命に違はじ。八重事代主神の言に違はじ。此葦原の中國者。天神の御子の命の隨に。獻らむと白し給ひき

故更且還り來て。其大國主神に問給はく。汝子等事代主神。建御名方神二神は。天神の御子の命の隨隨。違はじと白しぬ。故汝心奈何ぞと問給ひき  
爾答白らく。僕子等二神の白せる隨隨。僕も違はじ。此葦原の中國者。命の隨隨。既獻らむ。唯僕住所をば。天神の御子の天津日繼知しめさむ登陀流天之御巢如して。底津石根に

記傳十四ノ四十九  
史傳二十四ノ八

登陀流。記傳に詳なり中卷玉垣段にも此出雲の大神の御諭言に修三理我宮。如天皇之御舍。者御子必眞事登波乎とあり  
治賜者。上に治三我前。者とあり同し意なり百不足。八十といはん冠辭なり  
八十桐手。桐は限なり手は道なり万葉に道之永手と多くよめり  
隱而。顯而を去りて黃泉國になり  
侍。今此神のかく白し給ふは遠き黃泉國に隱なからも猶天神の御子の大御前に伺候居る心ばへにて守り奉らんの意なり  
紀に於は大已貴神報曰吾所治顯露事者皇孫當治吾將退治。顯事とあるもこもれりされば此世の中に有とある顯事は悉此大神のしらしめ事ぞと扱ひく僕住所者云々とあるは此國に留め給ふ御靈の纏りまさん所をいふなり  
神の御尾前。尾前は前後といふか如く前に立後に立て天神の御子を守り奉らんとなり  
乃隱也故隨白而の七字は本居翁の補へるなり其說紀傳に詳なり

御舍。ミアラカと訓むへし名義は在所かこは  
大國主神の御靈の鎮坐さん御社にて即件築の大社なり  
膳夫。上代には凡て饌を木葉に盛ける其葉を何の木にまれ絶てカシハといへり故に饌の事を執行ふ人をカシハデといふなり  
天御靈。は大御靈の誤りか  
禱白。御靈奉る祝詞なり  
櫛。櫛八玉神のウに化り給ふなり  
八十毘良迦。今の皿又土器などの類ならん海尊。いかなる物にかいまたを得ず

宮柱布斗斯理高天原に氷木多迦斯理て治め賜者。僕者百足す八十桐手に隱て侍なむ。亦僕子等百八十神者。八重事代主神。神之御尾前となりて。仕奉らば。違ふ神はあらじ。如此白して

乃隱也。故隨白而  
出雲國の多藝志之小濱に。天之御舍を造て水戸神の孫。櫛八玉神を膳夫として。天之御饗獻る時に。禱白して。櫛八玉神鷄に化て。海底に入て。底の波邇を咋出て。天八十毘良迦を作て。海布之柄を鎌て。燧日に作り。海尊之柄を燧杵に作て。火を鑽出て云けらく。是我所燧火者。高天の原には。神産巢日御祖命の登陀流天の新巢之凝煙の。八拳垂中を燒擧

標注 古事記讀本 神代卷



柄。壘をいふ和名抄幹は和名カラセあり  
 高天原には。さば盛に焼て煙の高く立登るな  
 いみづくいへるなり  
 天の新葉は神ムスヒノ命の宮の御厨の御果な  
 り  
 八掌垂まで。さば火を盛に焼てストの多き由  
 の説言なり  
 梅繩。梅の木皮してなへる繩なり  
 尾翼。小踏の意にて尾は借字なり  
 佐和佐和。囀々になり  
 登達々。多和々と同じ万葉八に秋ハキノ枝モトチ、さあり  
 梅繩之千尋打延。さば今の世にも長ばへさとする事なり竹竿に糸を付けて釣る業にはあらず  
 神産巢日命の御果。さば高天原にはさいふによりて假に假けて言なせるのみなり實は只此度造れる大國主神の新しき御舎の御果をいふなり御果を  
 新葉さしもいへるも新しく造れる御果なるか故なり  
 ふはさの事と聞ゆ

記傳十五  
 ノ一  
 史傳二十  
 ノ一

生出。出字坐の誤カ  
 天運岐志國運岐志日高日子番能邇々藝命。御  
 名義記傳に詳なり採皇御孫命と此尊を始め  
 て後の御世御世の天皇をも申奉る權なり

け。地の下者。底津石根に燒凝して。栲繩の千尋繩打延。釣せ  
 る海人之。大口之尾翼鱸。佐和佐和邇。控依騰て。打竹之登遠  
 遠登遠邇邇。天之眞魚咋獻らんと白しき  
 故建御雷神返參上りて。葦原の中國言向和平ぬる状を。復  
 奏白給ひき

爾天照大御神。高木神之命以て。太子正勝吾勝勝速日天忍  
 穗耳命に詔給はく。今葦原の中國平訖ぬと白す。故言依し  
 給へりし隨に。降坐して知看と詔給ひき  
 爾其太子。正勝吾勝速日天忍穗耳命の告白給はく。僕者將  
 降裝束せし間に。子生出まじつ。名は天運岐志國邇岐志天  
 津日高日子番能邇邇藝命。此御子を降す應しと。白給ひき。

此御子者

高木神之女萬幡豐秋津師比賣命に。御合まして。生ませる  
 御子。天火明命。次に日子番能邇邇藝命に坐す  
 是以白し給ふ隨に。日子番能邇邇藝命に詔科て。此豐葦原  
 水穗國者。汝知さむ國なりと。言依し賜ふ。故命の隨に。天降  
 ますべしと詔給ひき

爾日子番能邇邇藝命。天降ますむとする時に。天之八衢に  
 居て。上は高天原を光し。下は葦原中國を光す神是にあり  
 故爾天照大御神。高木神の命以て。天宇受賣神に詔給はく。  
 汝者手弱女なれども。伊牟迦布神と面勝神なり。故專汝往  
 て問むば  
 吾御子天降ますむと爲る道を。誰ぞかくて居ると問へど  
 詔給ひき  
 故問はせ給ふ時に。答白さく。僕者國神名は媛田毘古神也。

記傳十五  
 ノ十二  
 史傳二十  
 ノ十四

天之八衢。道股の意  
 上光云々紀に先驅者返白有二神一居二天八達  
 之衢其長七咫、背長七尺餘、且口尻明顯、眼  
 如三咫鏡一而絶然、似赤醜也とあり  
 伊牟迦布。紀に蓋是國津神有強禦之者、この  
 意なり  
 面勝。人と相對て愧ぢず怖れず面の強くて  
 負ひなり紀に汝者目三勝於人者とあり目勝と  
 面勝とは同意なり  
 專は。人の爲へき事をも取違て獨してする意



御前云々。紀には香先 啓 行 である是なり後世トテさいふ所に古語には皆トシテさいへり宣命なきに多し

伴緒。其部屬の長をいふ稱なり  
支加。支は字書に分也とあり上の水分神の注に訓分云云久麻理とあり  
遠岐新。紀石屋戸段に思金神者有思慮之智一乃思而白曰宜三圖二遣彼神之象一而奉三招請一也とある招請也

八尺勾魂。鏡。彼石屋戸段に眞賢木の上枝に取著し玉と中枝に取繫し八咫鏡なり  
御前の事。即此魂の御前の事なり  
爲政。マナシと訓へし万葉二に香大王之天下申賜者。續紀十七に御世御世に當りて天下奏シ賜はさありマナスは即政を執持て奉仕するをいふなり ○横井千秋曰勾玉さいふ名は形の曲れるを以ていふには非ず玉の光の目輝にてマカガを約めてマカさいふなりさいへり

此二柱。は大御神の御魂實の御鏡と思金神の御靈實をさし申せりサク、シロ冠辭考に詳なり  
イスノ宮。伊勢の大御神の宮なりこは延暦の儀式帳又倭姫世紀に詳なり  
御門之神也。只門を守り給ふ神と廣く云るには非ず皇御孫命の大御門を守り坐す神なり  
佐那縣。紀に伊勢狹長田とある此地の事なり  
神名帳又新年祭の祝詞にも櫛石靈神。豐石靈神二柱なるを此記には一神にして三つの御名あるなりさる例俗にも多し

出居る所以は。天神の御子天降坐すと聞つる故に。御前に仕奉らむとして。參向へ侍ふぞと白し給ひき  
爾天兒屋命。布刀玉命。天宇受賣命。伊斯許理度賣命。玉祖命。并て五伴緒を支加へて。天降まさしめ給ひき  
於是其遠岐斯八尺の勾魂。鏡。及草那藝の劍。亦常世思金神。手力男神。天石門別神を副賜ひて。詔者。此之鏡は。專我御魂として。吾御前を拜くが如。伊都岐奉り給へ。次に思金神は。御前の事を取持て。爲政給へと詔給ひき

此二柱の神は。佐久久斯侶伊須受能宮に拜祭る。次に登由宇氣神。此者外宮の度相に坐す神あり。次に天石戸別神。亦の名は櫛石窓神と謂し。亦の名は豐石窓神とも謂す。此神者御門の神なり。次に手力男神は。佐那縣に坐せり

中臣。名義は中執臣也神と君との御中を執持て申す職なる由なり諸の姓の地名に因る祖の名を取ると又事を取り物を取りなどせること種々ある中に此中臣は其職業に因れる姓也  
忌部首。は諸忌部の長なる由の姓なり

天之石位。只高天原なる大殿をいふ  
八重多那靈。多那は櫛引なり  
イツナチヲキ。紀に道別とあり道を開行なり  
ウキシマヨソリタシ。本居翁はいかなる事とも解かたしさいへり平田翁曰紀には浮屠在と書て此ウキシマヨソリといふとありこは浮屠に乗たる如く磐船に神等皆一群に纏り乗らせるを直にソリの發語として語り繼し古語也  
扱ソリタシは進發しなり万葉に越の立山白雲の千重を押わけ天そり高き立山とありソリと同一言なりさいへり數田年治曰ウキシマヨソリは泥漚の延語にて泥の滯りたる也ソリタシは史記に泥行乘機とあり機に乗發しなり

石鞞。は盤矢室なり石に例の堅き由なり  
頭椎。輕島宮段御歌にガブツクマヒとあるは頭衝眞目にて頭をクアさいふ例なり其腕に頭髓者、銀首如し髓也、今華人所帶之銀有此形也とあり

故其天兒屋命者中臣連  
布刀玉命者等之祖  
天宇受賣命者媛女君  
伊斯許理度賣命者鏡作連  
玉祖命者玉祖連等  
故爾天津日子番能邇邇藝命。天之石位を離れ。天之八重多那雲を押分て。伊都能知和岐知和岐豆。天浮橋に。宇岐士摩理。蘇理多多斯豆。竺紫日向之。高千穗之久士布流多氣に天降坐しき

故爾天忍日命。天津久米命二人。天之石鞞を取負ひ。頭椎之大刀を取佩き。天之波士弓を取持。天之眞鹿兒矢を手挟み。御前に立して仕奉りき



此處の本文。詔之此地者の五字錯れて上に移り替字脱ら肉字は向に誤れるなりと記傳にいへり

韓國。韓は借字にて空虛國の義にて即紀の空國なり

眞菜道。眞菜は借字にて紀に寛國此をタニマギといふとある是なり万葉廿に山川をいはれさくみてふみさほり國まぎしつゝとあり

朝日之直刺國。さは東に向ひて朝日影を正向ひに受る地をいふ夕日の日照國さは西の方の打晴て夕日の影も障らすす所をいふなるへし

事。さは元神は得聞ざりしを此ウズメノ命只獨よく同願せる意なり

願申。さは又其出居給へる故をも聞開て願せるを云

送奉。サルダゴノ神いづくへ往ますとまいはずして送奉れとあるは其本郷へ返給ふなるへし是に因て見れば伊勢は初より其本つ國なりけり

仕奉。は皇朝に仕奉るなり即後まである媛女の職是なり

阿邪阿。は伊勢國壹志郡なり

比良夫貝。古へ世に多かりし物と覺しくて人名に負る書紀續紀に多し

故其天忍日命此者久米直天津久米命等之祖也

於是膾肉韓國を。笠沙之御前に眞來通りて。詔之。此地は朝日之直刺國。夕日之日照國なり。故此地ぞ甚吉地と詔給ひて。底津石根に宮柱布斗斯理。高天原に冰椽多迦斯理て坐

故爾天宇受賣命に詔給はく。此御前に立て仕奉りし。媛田毘古大神をば。專顯し申せる汝送奉れ。亦其神の御名は。汝負て仕奉れと詔給ひき

是以媛女君等。其媛田毘古神の男神の名を負て。女を媛女の君と呼ぶ事是なり

故其媛田毘古神。阿邪阿に坐しける時に。漁して比良夫貝に。其手を咋合さえて。海鹽に沉溺給ひき

底度久。は底に沈み着くなり下なるヒコホアミノ命の大御歌に加毛度久とあるを紀にはカモヅクとある是度久は著なる證なり

都夫多都。は物の沈入る時水の鳴る音なり

阿和佐久。は沫咲なり沫の立つをいふ涙の花咲といふに同じ

神名帳に伊勢國壹志郡阿佐加神社三座とあり是此三つの御魂を祀れるなり

還到。還字罷字を誤れるなるべしマカリイタリテと訓へし伊勢に至れるなり

鮪廣物鱈狹物。は魚の大小をいへる雅言也一仕奉らんや。さは皇御孫の命の大御饌になりなむや否を問なり

紐小刀。紀にはヒ首と書れたり

島。は志摩國なり

速賢。初物をいふなるべし此名此所より外に古書に見當らず。源俊賴集に垣根には百舌鳥の早賢たていけりまでの田長にしのびかれつ

扱志摩國は殊に御賢を獻れし國にて万葉に御食國志摩又三代實錄に志摩國年貢の御賢四百三十一荷とあり

給ふ。さは其内を分て賜ふをいふなり

過麗美人。カホヨキヲトメノアヘルニと訓へし是雅言の格なり近世には美人にさいふ例なれども雅言はしからず美人にさいふ時は此方より美人に過ふなり此は美人の方より過ふなり古今集に志貴の山越に女の多く過りけるに

故其天忍日命此者久米直天津久米命等之祖也

於是膾肉韓國を。笠沙之御前に眞來通りて。詔之。此地は朝日之直刺國。夕日之日照國なり。故此地ぞ甚吉地と詔給ひて。底津石根に宮柱布斗斯理。高天原に冰椽多迦斯理て坐

故爾天宇受賣命に詔給はく。此御前に立て仕奉りし。媛田毘古大神をば。專顯し申せる汝送奉れ。亦其神の御名は。汝負て仕奉れと詔給ひき

是以媛女君等。其媛田毘古神の男神の名を負て。女を媛女の君と呼ぶ事是なり

故其媛田毘古神。阿邪阿に坐しける時に。漁して比良夫貝に。其手を咋合さえて。海鹽に沉溺給ひき

於其底に。沉居給ふ時の名を。底度久御魂と謂し。其海水の都夫多都時の名を。都夫多都御魂と謂し。其阿和佐久時の名を。阿和佐久御魂と謂す

於是媛田毘古神を送りて。還り到て。乃悉に鮪廣物鱈狹物を追聚て。汝者天神の御子に仕奉らむ耶と問ふ時に。諸の魚共皆仕奉らむと白す中に。海鼠白さす

爾天宇受賣命。海鼠に謂けらく。此口乎答せぬ口といひて。紐小刀以て。其口を拆き。故今に海鼠の口拆なり

是以御世御世。島之速賢獻れる時に。媛女の君等に給ふなり

於是天津日高日子番能邇邇藝能命。笠沙の御前に。麗き美人の遇るに。誰が女ぞと問給ひき。答白給はく。大山津見神の女。名は神阿多都比賣。亦の名は木之花之佐久夜毘賣と

於其底に。沉居給ふ時の名を。底度久御魂と謂し。其海水の都夫多都時の名を。都夫多都御魂と謂し。其阿和佐久時の名を。阿和佐久御魂と謂す

於是媛田毘古神を送りて。還り到て。乃悉に鮪廣物鱈狹物を追聚て。汝者天神の御子に仕奉らむ耶と問ふ時に。諸の魚共皆仕奉らむと白す中に。海鼠白さす

爾天宇受賣命。海鼠に謂けらく。此口乎答せぬ口といひて。紐小刀以て。其口を拆き。故今に海鼠の口拆なり

是以御世御世。島之速賢獻れる時に。媛女の君等に給ふなり

於是天津日高日子番能邇邇藝能命。笠沙の御前に。麗き美人の遇るに。誰が女ぞと問給ひき。答白給はく。大山津見神の女。名は神阿多都比賣。亦の名は木之花之佐久夜毘賣と

標注 古事記讀本 神代卷



なごあり

目合。マアハヒと調べし上にいへり  
 僕は得白さト云々。は上の建御雷神の間給へ  
 るに大國主の答給ふに同じ  
 百取。其数の多をいふなり取は紀神功巻に荷  
 持田村。荷持此をノトリといふとある持の如  
 し  
 机代。机は坏居にて飲食の器を居る由の名な  
 り  
 代。は物實にて何にまれ其物をさしていふな  
 り扱今かく獻るは取取の禮物なり  
 奉出。マアマダと調べし紀に奉。道十四十  
 七廿四の巻に見え万葉に奉さもあり  
 其弟。古は姉に對へて後に生れたるをば女を  
 もオトと云て妹さばいはす記中の例皆然り  
 使してば。使ひ給ひてあらばさいふ意  
 トキハ。は常石の切れるなり  
 カキハ。は堅き石のの書きたるなり  
 アマヒ。は跪くはかなき意甘も同言なり俗に  
 堅からぬをアマイといへり  
 此今。爾今にはあらじか

謂し給ひき。又汝之兄弟有やと問給へば。我姉石長比賣在  
 と。答白給ひき  
 爾詔給はく。吾汝に目合せむと欲ふは奈何にと詔給へば。  
 僕は得白さじ。僕父大山津見神ぞ。白さむと白給ひき  
 故其父大山津見神に。乞に遣しける時に。大歡喜びて。其姉  
 石長比賣を副て。百取の机代の物を持しめて奉出しき  
 故爾其姉は。甚凶醜に因て。見畏て。返送給ひて。唯其弟木花  
 之佐久夜毘賣をのみ留て。一宿婚しつ  
 爾大山津見神。石長比賣を返し給へるに因て。大く耻ぢて。  
 白し送り給ひける言は。我之女二並べて立奉る由は。石長  
 比賣を使しては。天神の御子の命は。雨零風吹けども。恒な  
 る石の如く。常堅不動に坐せ。亦木花之佐久夜毘賣を使は  
 しては。木花の榮るが如。榮え坐ませと。宇氣比氏。貢進き  
 此今石長比賣を返して。木花之佐久夜毘賣獨り留り給ひ

記傳十六  
ノ卅七

天皇命の三字をスヲラミコトと調べしかく命  
 の字を添て書奉る事出雲國造神賀詞に二所載  
 紀祝詞の中にも見えたり  
 參出。は運々壽命の御許に詣るなり  
 幸。さは恙なく平安なるをいへり万葉にサキ  
 ケマシテ又眞福。福さもあり  
 戸なき。さは火を避て外へ進出べき由なる  
 べく撰へたるなり  
 火照命。ホアリと調べしホノテルと調むはわ  
 るし火の燃起て照れる時に生ませる故の御名  
 なり

つれば。天神の御子の御壽は。木花之阿摩比能微。坐なむと  
 すと白し給ひき  
 故是以て。今に至まで。天皇命等の御命。長くはまざるな  
 り  
 故後に木花之佐久夜毘賣。參出て白給はく。妾妊身を。今臨  
 産べき時になりぬ。是天神の御子。私に産まづるべきにあ  
 らず。故請すと白給ひき  
 爾詔給はく。佐久夜毘賣。一宿にや妊る。是我御子に非ず。必  
 國神の子にこそあらめと答白給へば。吾妊之御子。若國神  
 の子ならむれば。産むこと幸からじ。若天神の御子に坐は。  
 幸からむと白して  
 即戸なき八尋殿を作て。其殿内に入まして。土以て塗塞ぎ  
 て。産ます時に方りて。其殿に火を著てなも産ましける  
 故其火盛に焼る時に。所生る御子の名は火照命 此者隼人阿  
 多君之祖



火須勢理命。火の熾りに進み燃る時に生ませ  
る故の御名なり  
火遠理命。こは火の衰へたる時に生ませる故  
の御名にて火弱りの義なり  
海佐知。山佐知。サチは幸取にてキを音キトリ  
を切めてサといふなり扱其海山のサキを取給  
ふを以て幸取と申せるなり  
毛龜物毛柔物。は諸の獸をいへる古の雅言な  
り  
海幸取産の幸取。は魚を取る釣鉤なごなり  
山幸取産の幸取。は獸を取る具にて弓矢なり  
織。は事のかつ／＼に始めて其所に及びたる  
如き意にて俗言にやう／＼と易たりといふ意  
なり  
得相易。エカへ給ヒキと訓べしエカ先に讀べ  
き由は上に詳なり傳十二の十七葉をも見るべ  
し  
乞其鉤。この鉤は只ハリと訓べし  
山サチも海サチも己々のサチ／＼と見れば早  
く心得らるゝなり火照命の自からいふ己には  
非ず  
乞置。コヒハタリキと訓べし万葉十六に課役  
徵者あり

次に生ませる御子の名は火須勢理命  
次に生ませる御子の御名は火遠理命。亦の名は天津日高  
日子穗穗手見命<sup>三</sup>  
故火照命者。海佐知毘古として。鱈廣物鱈狭物を取給ひ  
火遠理命は。山佐知毘古として。毛龜物毛柔物を取給ひき  
爾火遠理命。其兄火照命に。各に佐知を易て用ひてむとい  
ひて。二度乞し／＼かども。許さざりき。然ども遂に織に得相  
易給ひき  
爾火遠理命。海佐知を以て魚釣すに。都て一魚も得給はず。  
亦其鉤をさへ海に失ひ給ひき  
於是其兄火照命。其鉤を乞て。山佐知も己之佐知佐知。海佐  
知も己之佐知佐知。今各佐知返さむと謂ふ時に  
其弟火遠理命答曰。汝の鉤者魚釣りしに一魚も得ず。遂  
に海に失ひてきと詔給へ共其兄強に乞置りき

破。ヤブリテと訓べし毀壞字の意なり  
正木鉤。正字は讀べからず  
鹽椎神。一柱の神の名にあらず凡て物を能識  
れる人ないふ稱にて名義は知識大都知なり紀  
には鹽土の老翁又一書には鹽筒ともあり  
虚空津日高の御事は下に詳なり  
無間勝間之小船。こは龜の編める竹と竹との  
間の堅く密りて目のなきをいふなり  
カツマ。は堅津間の約まりたるにて紀には即  
堅間とあり小船とは必しも船の形に違れりこ  
にはあらし何物にもあれ乗て水を行ものを船  
さはいふなるべし  
味御路。は紀に可伶御路ともありいさ善き道  
といはんが如し扱こに御路と書るこれ道の  
本義なるべし  
往者。イマシナバと訓べし凡てユキマスとい  
ふべきをイマスといへる事古言に常多し  
魚鱗。はイロコと訓べしこは壯麗く大なる宮  
の殿門など數多並立連りて見ゆる状をたごへ  
たるなるべし

故其弟。御佩之十拳劔を破りて。五百鉤を作て償ひ給へど  
も取らず。亦一千鉤を作て。償ひ給へども受ず。猶其正本  
の鉤を得むとぞいひける  
於是其弟。海邊に泣患ひ居ます時に。鹽椎の神來て問けら  
く。何にぞ虚空津日高之泣患ひ給ふ所由はと問へば。答言  
はく。我兄と鉤を易て。其鉤を失ひてき。かくて其鉤を乞ふ  
故に。多の鉤を償ひしかども。受ず。猶其本の鉤を得むと  
いふなり。故泣患ふと詔給ひき  
爾鹽椎の神。我汝命の爲に。善議せんといひて。即無間勝間  
之小船を造りて。其船に載奉りて。教曰く。我其船を押流さ  
は。差暫し往ませ。味御路あらむ  
乃其道に乗て往者。魚鱗の如造れる宮室。其綿津見神の宮  
なり。其神の御門に到ましなは。傍の井の上に湯津香木あ  
らん



備。ツフサニと訓むべし

從婢。マカダチと訓べし前子等々の意なるべし紀に侍者と書き又欽明卷に從女と書き皆然訓めり

玉器。タマモロと訓べし紀武烈卷にタマモロニ水サヘモリとあり大膳式に片塊十二口と見えたり

有光。カゲアリと訓べし火遠理命の影の井の水にうつりて見え給ふなり

玉を器に著て離れざらしむる術やありけん神代にさる類の術折々見ゆ

我王。綿津見神をさしていへるなり貴。めてたく好き意也太占。大祝詞。太。幣などの類の太と同言にて太きにタの添りたるなり

故其木の上に坐ませば。其海の神の御女。見て相議者ぞと。教へまつりき

故教し隨に小し行けるに。備に其言の如くなりしかば。即其香木に登りて。坐ませしき

爾海神の女。豐玉毘賣の從婢。玉器を持て。水酌むとする時に。井に光あり。仰て見れば。麗壯夫あり。いと異奇と以爲き

爾火遠理命其婢を見給ひて。水を得しめよと乞給ふ。婢乃水を酌て。玉器に入て貢進りき

爾水をは飲給はずして。御頸の璵を解かして。口に含みて。其玉器に唾き入れ給ひき

於是其璵器に著て。婢璵を得離たず故璵著ながら。豐玉比賣命に進りき

爾其璵を見て婢に。若門の外に人有やと問給へば。我井上の香木之上に人坐す。甚麗しき壯夫にます。我王にも益り

て甚貴し

故其人水を乞せる故に奉しかば。水をは飲さずて。此璵をなも唾入給へる。是得離たぬ故に。入ながら將來て獻りぬと白しき

爾豐玉毘賣命。奇しと思して。出見て。乃ち見感て。目合して。其父に。吾門に麗しき人有と白給ひき

爾海神自ら出見て。此人は天津日高之御子。虚空津日高にませりといひて。即内に率て入れ奉りて。美智の皮の疊八

重を敷。亦純疊八重を其上に敷て。其上に坐せ奉りて。百取の机代の物を具へて。御饗して。即ち其御女豐玉毘賣を婚

せ奉りき

故三年といふまで。其國に住給ひき

於是火遠理命。その初の事を思して。大なる歎一つし給ひき。故豐玉毘賣命。其御歎を聞かして。其父に白し給はく。三

見感。ミメテト訓べしメテてふ言は見驚。見喜ふとある類の古言なり  
虚空津日高。谷川氏は天津日高は天子の稱。虚空津日高は太子の稱なりといへり記傳に詳なり  
美知皮。紀に海鹽と作て此を美知といふとあり爾に海鳥也と注す  
疊。白檮宮段の大御歌にスカダミ。ミ。イヤサヤシキアなどありていと古き名なり上代にて既齒などの類をも凡てタミミといひしなり  
鏡。キヌなり古書には只精字鏡字通はし用ひたり  
思。其初事。とは只本國を戀しくおもほしめすなり  
ナグキ。長息にて心に思ひ結ばる。事ある折は長き息の衝る。いふ  
大なる。とは其長息の聲の高く大なるをいふ



若き何とを重れいへる事程なられど古言にはかくさまにもいひけむかし恒は。今まではいふことなり

調。ハタレレと調へし上には乞微さあり  
海之大小魚。ハタレレモノノハタレサモノ  
調へし紀の二書に盡召。鰻鱺。而問之  
あり

頃者。此言いかゞ紀の二書に赤女久有三口疾  
さある久に當りて聞ゆ  
赤海鰻魚。は鰻なり  
鰻。ノギと調へし和名抄に鰻魚刺在。喉也和名  
乃木さあり  
清洗。即洗ひ清むるをいふ

年住給へども。恒は歎かすこともなかりしに。今夜大なる歎ひとつし給ひつるは。若何の由故あるにかと。白し給へは。其父の大神。其智夫に問まつらく。今日我女の語るを聞けは。三年坐ませども。恒は歎かす事もなかりしに。今夜大なる歎し給ひつと申せり。若由ありや。亦此間に到ませる由は。奈何にぞと。問まつりき  
爾其大神に。備に其兄の。失にし鉤を罰れる状を。語り給ひき  
是以海神。悉に海之大小魚を召集て。若此鉤を取れる魚ありやと問給ふ  
故諸の魚ども白さく。頃者赤海鰻魚なも。喉に鰻ありて。物得食すと愁ふあれば。必是取つらむと白しき  
於是赤海鰻魚の喉を探しかは。鉤あり。即ち取出て清洗し

洪煩鉤。オホは愁思ふ事有て心の晴ぬ意  
須々鉤。伊勢物語に心細くすゝるなる云々  
あり辛の意なるべし  
貧鉤。マヂチと調へしマヂはマツシの切り  
たる  
宇流鉤。紀に癡駭鉤此をウルケサといふさあり此字の意なり  
鉤をチと調へしツリの約りたるにて此種々の不幸事を釣る具といふ意なり  
後手。上の黄泉の段に見ゆは。鰻鱺なり  
高田。はアゲタと調へし地高く能く田なり  
下田。は窪み卑くて水多き田なり  
シカン給フ事。初め。詛事又田佃りて稔を得ず貧しくなる事などを都ていふなり

て。火遠理命に奉る時に。その綿津見大神。誨奉りけらく。此鉤を。其兄に給はん時に。言給はん状は。此鉤は洪煩鉤。須須鉤。貧鉤。宇流鉤といひて。後手に賜へ。然して。其兄高田を作らば。汝命は下田を營給へ。其兄下田を作らば。汝命は高田を營給へ。然し給はば。吾水を掌れば。三年之間。必其兄貧窮なりなむ。若其然爲給ふ事を恨怨て。攻戦なは。鹽盈珠を出して溺らし。若其愁請さは。鹽乾珠を出して活し。かくして。惣苦給へと云して。鹽滿珠。鹽乾珠。并て兩箇を授奉りて。即悉に和邇魚共を召集て。問日給はく。今天津日高之御子。虛空津日高。上つ國に出幸ませむとす。誰は幾日に送奉りて。覆奏さむと問給ひき  
故各己身の尋長の隨に。日を限りて白す中に。一尋和邇。僕は一日に送奉りて。還り來なむと白す  
故爾其一尋和邇に。然者汝送奉りてよ。若海中を渡る時。な



組小刀。は送奉し功を賞給ての賜物なるべし。佐比持神の名義は彼賜はれる組小刀を持つ由なり。紀の神武紀に稻飯命拔劍入海化為三勳持神。又推古紀にヤチナラバクレノマサロモあるも吳之真勳なり。勳字は借字なり。上代銀をサロモといひけん。稍貧賁。彼オが鉤マデ鉤といへる。謂言の驗に當れり。起死心。彼ス、鉤ウル鉤といへる。謂言の驗なり。稽首。ノミマナサクと訓べし。紀崇神卷に叩首曰云々叩首此をノムといふとあり。守護人紀一書曰。是以二火酢原命而齋。諸軍人等至。今不。應。天皇宮牆之傍。代。吹。向。而。奉。事。也。とあり。其時之種々之態。こは彼弟命の據盤珠を出し給へる時。溺れ苦みたりし状態を行ふをいふ。尚紀の一書。軍人司式等紀傳に詳なり。參出。日子種々手見命の御所になり。已。ハヤクヨリと訓べし。波限。浪の打寄る際なり。

惶畏ませ奉りそと詔て  
即其和邇の頸に載奉りて。送出し奉りき。  
故如期。一日の内に送奉りき。其和邇返なむとせし時に。所佩せる組小刀を解かして。其頸に著てなも返し給ひける。故其一尋和邇者。今に佐比持の神とぞいふなる。是以備に海神の教し言の如して。其鉤を與へ給ひき。故それより以後。稍貧賁くなりて。更に荒き心を起して。迫來。攻めんとする時は。鹽盈珠を出して溺らし。其愁ひ請せは。鹽乾珠を出して救ひ。如此して。愍苦給ふ時に。稽首白さく。僕者今より以後。汝命の晝夜の守護人となりてぞ。仕奉らむと白しき。故今に至るまで。其溺し時の種々の態。絶えず仕奉るなり。於是海神の女豊玉毘賣命。自ら參出て白給はく。妾已妊身を今臨産時になりぬ。此を思ふに。天神の御子を。海原に生

葦草。訓注にカヤといふとあり。屋をふく草をいふ。

産殿。紀には産屋とあり

委蛇。紀にも遠飾とあり。説文に斜去良とあり。蛇などの行良にされるなるべし。心耻。ウラハヅカシと訓べし。心をウラといふはウラガナシのウラサビシなど。是なり。通。トホシと訓べし。海神宮と此國との間を易く往來するをいふ。

奉るべきにあらず  
故參出到つと白給ひき。爾即其海邊の波限に。鵜の羽を葦草にして。産殿を造りき。於是其産殿。いまだ葺合ぬに。御腹忍がたくなり給ひければ。産殿に入ましき。爾御子産まむとむとする時に。其日子に白言はく。凡て它國の人。臨産時になれば。本つ國の形になりてなも産生なる。故妾も今本の身になりて産なむとす。妾を勿見給ひと白給ひき。於是其言を奇しと思ほして。其方に産給ふを竊伺給へば。八尋和邇に化て。匍匐委蛇き。即見驚畏みて。遁退給ひき。爾豊玉毘賣命。其伺見給ひし事を知して。心耻しと以爲して。其御子を生置て。妾恒は海つ道を通して。往來はんとこそ欲ひしを。吾形を伺見給ひしが。甚作しき事と白して。即



記傳十七  
ノ七十二

海阪。阪は堺の義にて海神の國と此國との間の隔ある處をいふ  
波限建。建は美稱なり  
不合命。アハセズを切めてアヘズといふは古言なり  
盤恨。ウラミヲモモ訓べし恨みなむらの意  
治養。ヒタシと訓べし中巻玉垣宮段に日足奉とある此字の意紀にも養。子養など皆ま訓めり  
附。ことつくるなり万葉に常陸さし行かん感も我戀をふるしてつけて妹にまらさん  
其歌曰。ソノウタと訓て曰字讀べからず  
御歌の意は赤玉は緒さへ光りていさうるはしけれど君が御よそひは猶まさりてめでたしと慕ひ奉る御こゝろなり  
奥つ鳥。は鴨の枕辭なり  
鴨ドク島。着をドクといへる例は上に底度久御魂さありトとツと通へるなりタドキ。タツキなどの如し海の底にある海神宮を島とみ給へるは海路を経て行所なる故に島に准へて詔へるなり  
よのこさん。よは萬葉に夜はも夜のこさんと書はも日のこさんなどあり夜の限り日の限りといふ意なりヨは人の生涯をいふ世にて御自の御齡なり  
五百八十歳。神代の年の數の事記傳史傳に詳なり

海阪を塞て。返り入ましき  
是以其所産御子名を。天津日高日子波限建鵜葺草葺不合命と謂す  
然ども後ば。其伺給ひし情を恨つくも。戀きに忍給はずて。其御子を治養し奉る縁に因て。其弟玉依毘賣に附て。歌をなも獻り給ひける。其歌曰  
あかだまは をさへひかれど  
赤玉 結 盤 光  
まらたまの きみがよそひし  
白玉 君之儀  
たふとくありけり  
爾その比古遅答給ひける歌曰  
おきつとり かもどくしまに  
奥 鴨 着 島  
わがいねし いもはわすれじ  
吾 申 殿 妹者 不忘  
よのことく に  
世之 盡  
故日子穗穗手見命ハ。高千穂の宮に五百より八十歳坐し

記傳十七  
ノ八十九

五瀬命。御名義は豊稻シ子を切めてセといふは早稻などの如し  
稻氷命。紀に稻飯と出たる字の意なり  
常世國。は上に詳なり  
御妣國として。御母の國なるに因て。といはんが如し御妣に娶まし、事等は。葛花。菟渡鏡に詳なり

き。御陵ハ即その高千穂の山の西の方に在り  
是天津日高日高波限建鵜葺草葺不合命。其姨玉依毘賣命に娶て。生ませる御子名は。五瀬命。次に稻氷命。次に御毛沼命。次に若御毛沼命。亦の名は豊御毛沼命。亦の名は神倭伊波禮毘古命 柱 四  
故御毛沼命は波の穂を跳て。常世の國に渡坐し。稻氷命ハ。御妣の國として。海原に入坐しき

高千穂 山 幸 太 瀬  
風 嶺 高 文

神代卷  
神代卷  
神代卷

古事記讀本神代卷終

標注 古事記讀本 神代卷







7
44



終